

朝礼

1

おはようございます。皆さまお揃いでよい年、よい朝をお迎えで、まことにおめでとう存じます。

「川柳大学」も皆さまの鉢巻姿のご支援を得て、よいしょと進水することができました。ありがとうございます。

「川柳大学」という名は、某日するりと出てまいりましただけで、何ら深い意味はありません。「名は体を表す、おつかねえや」と尻込みされたお方もありましたが、なに、世の中、大学だらけ。老人大学もあれば大学イモもあり、メガネ眼ぐすり、すべからく大学の大安売りです。

「川柳大学」には入学試験も卒業試験もありません。しかし、大きく学び大きく育ててほしいものはあります。

それは「おもしろ」のここです。吉本喜劇と直結しないで下さいませよ。文学・芸術すべての根源であるところの「おもしろ」は手強いですぞ。おもしろくなくて誰が読んでくれましようや。ぎよつとする。ほのぼのとする。しみじみ、なるほど、これみんな「おもしろ」。「川柳大学」はこれを求めつづけて波を蹴立てます。「大学読んだか? おもろいな。一ペん入ってみよか」どうぞどうぞ! 門はいつでも全開です。どうぞ!

一九九六年元旦

学長 時実新子



おはようございます。

そろそろ春の兆し、と思ったとたんに神戸は雪になりました。なに、北国の人たちには笑われるといどの雪舞いですが、東京も神戸も雪にはめっぽう弱い。中でも東海道新幹線のへこたれようといつたら！　すぐに六十分遅れたりする。予定は未定の人生そのものですよね。

そんな中を四日間に四回新幹線に乗りました。スケジュールが東京、大阪、東京と、大阪がアンコになつたのですよ。お餅のアンコは美味しいですがねえ。でも、乗り切りました。体力テスト合格！

「川柳大学」発行所には、「七福ねこ」がいます。つらつら眺めていると、皆さんのお顔に見えてくるという不思議なねこたち。「常識を半歩出よう」と、今朝は左から二番目のタマが申します。「一步じやダメ？」「ダメ。半歩。大股の一步ではドグマになるよ」「ふむ、ふむ、難しいけど半歩をやってみるわ」と対話も楽しみです。ちなみにタマはマスと米俵、イチは熊手とお通い帳、トラは鯛、クロはお宝、モモは小判、ロクは小槌、どんじりのグレは何と赤緒の下駄を持っています。具象が大切と言っているような気がします。

一九九六年二月一日

学長 時実新子



おはようございます。春ですね、うれしいですね。

私は四季にも日々の天候にも不満は一切感じない人間です。唯一の長所かも知れません。降つても照つてもありがたいのです。嵐の日には勇気をもらい、霧の夜は夢の中に遊びます。おめでたい性格を親に感謝しています。まもなくお花見シーズンですが、去年の桜はつらかつた。今年もまだまだの神戸ですけれど、蓄の力つてすごいですね。生命そのものですよね。

私は「樹になりたい」と思うことがあります。どこの地の、どんな木でもいい。木になれたなら、樹になる努力をしようと思っています。何のために? イジメられた子と話をしたい一心です。それでも死ぬと言うならば一緒に死んであげたいと。厄介でお節介なオバサンの樹に私はなりたい。

ところで、樹と木は違いますよね。船と舟もね。「なく」に至っては、泣・哭・啼・鳴、それぞれ意味が違います。現代用語は簡単を目指していますが、五七五がいのちの私たちは、もつも言葉や文字にこだわつてもいいと思います。たとえば「啼く」は、鶯以上の大きさの鳥の鳴き声。雀は蛙や虫と仲良しなので「鳴く」のです。

一九九六年四月一日

学長 時実新子



おはようございます。

五月が来る、と思うだに胸を薰風が吹き渡る爽やかさを感じますね。色なら青でしょうか、緑でしょうか。星座なら牡牛座と双子座ですね。

緑はだんだん濃くなつて「蒼」になり、八月には「鬱蒼」となり、黒さえ加えて威圧するようになります。まあれくらい濃い緑でないと、真夏の太陽には耐えられないでしようからね。とにかく素敵な五月です。

「風薰る季節となりました」と、手紙にもつい、書いてしまいます。その通りであり、礼儀にもかなつているのですけれど、毎年では芸がありません。何か工夫したいと思いつつ、私も「風薰る」からなかなか脱出できないでいます。川柳のマンネリも脱げがたいものだと、嘆息していました処、先日次のような句に出会いました。

先生 青い青い雪が降ります 谷野昇子

東京中日新聞の投稿ハガキの中の一句です。不意に私の目に涙が盛りあがつてきて、文字がかすみました。私は彼女を知りません。でも、彼女の心はよく見えました。哀しみや憤りが鎮まつた「青」。手紙のようなこの一句を抱きしめ、私は昇子さんを抱きしめました。五月、あなたの頭上にも青い青い花が降りますように。



おはようございます。

李白の詩に「独坐敬亭山」というのがありますね。

「胸中事無く眼中人なし」の境地を詠んだもの。「只敬亭山あるのみ」とする静かな心が羨ましいです。時に李白六十三歳。昔の人は偉いもんだと思います。ところが人生とは思うようにいかぬものでございました。ご存じのごとく、その後の李白は波乱万丈の中で終焉を迎えたのでした。

比べるのも憚りますが、私など「胸中事有り眼中人有り」の消日。つくづくと恥じつとも、だからこそ川柳と、枯れざる煩惱を愛してもいる昨今。しかしながら、「事有り」に耐えかねる日が私にもありますて、某日娘にダイヤル、いきなり「もう死にたいよ」と弱音を吐きましたところ、間髪を入れず「無理に今死ななくとも間もなく死ねるじゃないの」と、わが子ながらのご名答。

ハハハと泣いて蘇生しました。

くどくど数々訴えていたら娘もくどくど思い悪い互いに不毛の長電話になつていただろうと思ひます。万能の神よりも「一願成就」の神さまに人気があるよう、川柳も「一句一訴」が有効だと、改めて確認しました。



おはようございます。

梅雨も上がつて晴れの夏というのに兄弟喧嘩が始まりました。喧嘩結構ながら、私恨、私憤はひとつもない。

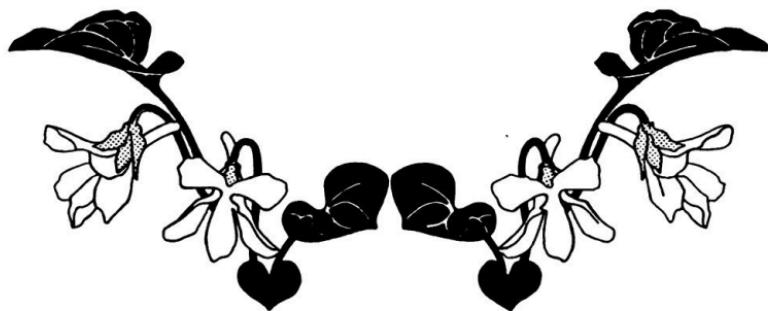
川柳は残念ながらまだ近代批評の洗礼を受けたことがないので、ちょっと傷口に触れられると人生の一大事のごとく血相を変えます。まあ、徐々に大人に育つていくはずですから、どうぞ口角泡をとばしてください。

しかしながら、「自分の敵は自分、自分に克つ、作品で勝つ」ことだけは再確認しましょう。百人いれば百の口があり、百の耳と目もあります。敵が半分なら味方も半分。それが世の中の面白いところです。反論の価値もないなら無視が最高です。価値ある敵にはどうか誌上で反論してください。個人的な手紙のやり取りなどで私を悩ませないでください。「中退するぞ」「やめるぞ」の脅しも私には効き目無しと心得てください。

退学結構。そんな小粒で卑怯な会員は要りません。私も人を見る目がなかつたことを反省はしますが、決して引き止めません。私はトマトと八方美人が嫌いです。さあ、入道雲に乗つて、おおらかに前へ！

一九九六年七月一日

学長 時実新子



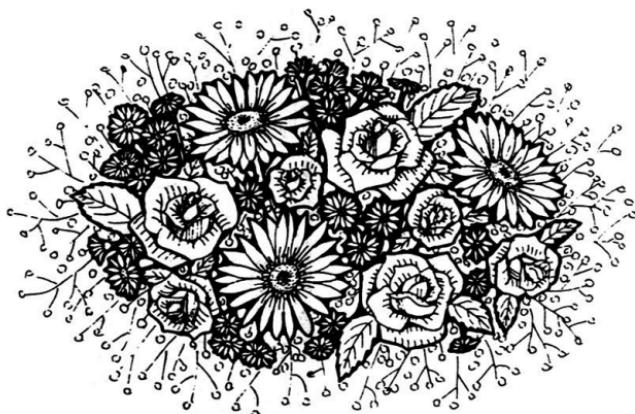
おはようございます。

宇野千代さんも天寿を全うされまして、この夏の日射
しはこころなしか桃の香りがするようでございます。

それにつけても「死んで語られる人」の幸不幸を感じ
ました。女流作家お三方が宇野さんを偲ばれてのテレビ
を台所からチラチラ覗いただけですので、しかとは云々
できませんが、特に瀬戸内寂聴さんの発言に、「うわア
女同士つてすごいな、だから作家なのだけど……」と、
複雑な思いを味わいました。

較べて私の果報にただただ感謝です。生きて「時実新
子の世界」が編まれる、本人が読める。この幸せのあま
りの大きさに、臨時増刊と入れ替わりに死んでも本望と
さえ思っています。そこで8月号の新子作品20句は「生
誕」といたしました。

卷頭20句に力の衰えが見えましたなら「赤で○×」だ
けなく、どうぞ「死ね！」と指さしてください。私も
あなたと存分に川柳論を展開した上で潔く死にます。
皆さんもそれくらいの気迫で作品をお出しください。
では盛夏の、ご健吟を！

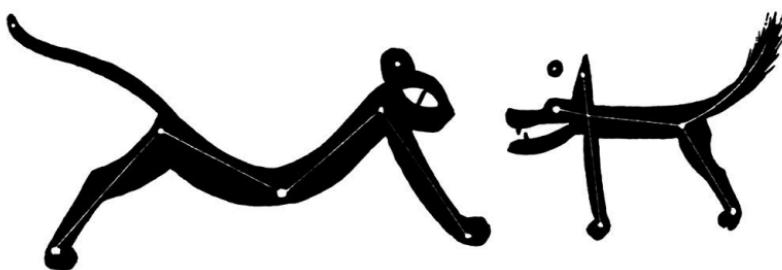


おはようございます。

素敵な夏をお過ごしでしたか。日盛りが若者のためにあるとすれば、夏の朝と夕は高齢者のために天が与えてくれた時間のような気がします。風は新涼、花は曼珠沙華。人生なら九月は四十代でしょうか。

「年寄り」（「り」を取り除けば畏敬の称です。武家や町衆の取りまとめ役。相撲の例もあり）と若者に挾まれている九月の方々、どうか美しく奮起してください。

「学園日記」でごらんのごとく、年寄りの私も奮起（？）して川柳大学の廣告塔となつてテレビやラジオその他で頑張っています。ところがこの廣告塔、さっぱり欲がありませぬ。つまり、余所様の大会やパーティへ「大学」や自分の本などを持ち込んで「寄つてらっしゃい見てらっしゃい！」さあ買った買った！」ができないのです。とても失礼な氣がして。それを堂々とやつている人を各所で見て反省しかけましたが、やっぱり私流を貫きます。会員の川村百代がいみじくも言つてくれました。「どここの世界に観音サンが手エ出してお賽銭を取りはりますか」。斯くて秋立つ風の中。皆さんよろしく頼みます。



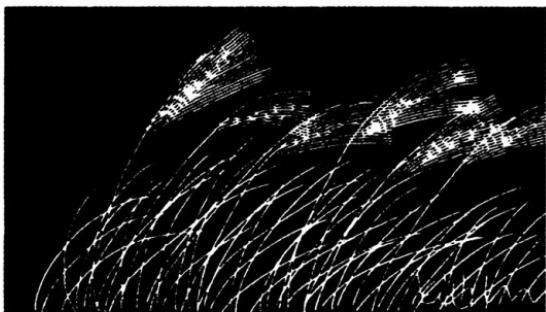
おはようございます。

秋田で秋を迎えました。事務局スタッフの協力のおかげで夏休みを頂いたのです。主宰と編集長がいなくとも大丈夫な事務局に育つことが離れてみるとよくわかるて、感謝でいっぱいです。

こんな美しいゆとりの時間は生まれて初めてのこと。カナカナが鳴き、コオロギが鳴き、オニヤンマが昼寝の私の髪をくすぐり、稻穂を渡る風が香ります。「こんな幸せを頂いていいのかしら、夢の中にいるのだわキット」と、頬をつねることしばしばでした。——もつとも私の仕事に夏休みはありませんので、晩三時起きは相変わらずですが、雑木林の目覚めの音が「気」をくれるのです。少しはいい仕事ができたかなと自惚れています。

寅さんが死にました。地震もありました。碌郎とケンカもしました。でも、雑木林はピクともしない。平然と存在し人に安らぎさえ与える。雑木林の中でもいろんな事が起こっているはずなのに……。

あのように美しく強く！私たちの書く川柳もどこかで誰かを癒すことができるといいですね。秋田の秋をおみやげに神戸へ帰ります。ありがとうございます。皆さん。



おはようございます。

かねてから思っていたことです。政界と川柳界、実によく似ていますねえ。(まあどこの世界もでしようが)

この一文が活字になつてお目にとまるころは、すでに総選挙も終わつて、意外な結果が出ているか、相も変わらずなのかわかりませんが、9月20日現在の混沌は正に鳥獣戯画の感です。

○○党(誌)につくか△△党(誌)に拠るか——。コウモリ跋扈して、その眼は欲にランランと血走る。川柳界にコウモリなんていない、と思う私は甘いのかもしれません。「川柳展望」廃刊、「川柳大学」発足を決意実行して一年。残念ながらコウモリはいたのでした。

自己顯示欲は作家の大切な資質です。これ無くして何の芸術であり文芸でしょうや。そして誰しも自分大事。これまた理の当然です。しかし、自分の志向決定は足を踏んまえ、天下を睨み、明鏡に照らして恥じぬものであります。他者にそれを押しつける気は毛頭ありませんが、私なりの「川柳の論理」は確立しました。去る人は去り給え。^{たゞみ}二また三またの道を往く人は往き給え。川柳界の蒼直人の去就もまた興味津津です。



おはようございます。

いよいよ極月と申したいですが、今はまだ秋がやつと
深みはじめた十月の二十日です。

久しぶりに空気を吸って歩きました。いや、その美しいこと！ 風に目を洗いながらどこまでも歩きました。公園でちょっと休んで、この一年を思いました。皆様のご協力を思っているうちに紅葉に涙が混りました。もちろんうれし涙です。

来る年は「いそがしい」を禁句にしようと誓いました。

私の父は九十六歳で死ぬ前に言いました。

「疲れるってどういう感じなんじやろう。一度もその味を知らんとおさらばするのは残念じや」と。

いくら遊び人の父でも、体は疲れていたでしょうが、心がそれを感じなかつたのだと思います。

月刊のスピードに息切れをなさる人は、どうぞご遠慮なくお休みください。私はおかげさまで父に似ました。

「桜の園」が千人を突破しても平気です。

いのちは「今」しか確約されていません。心のお丈夫なお方は、どうぞご遠慮なく出句をお続けください。継続は力なり、です。私、全身全霊でお待ちしています。



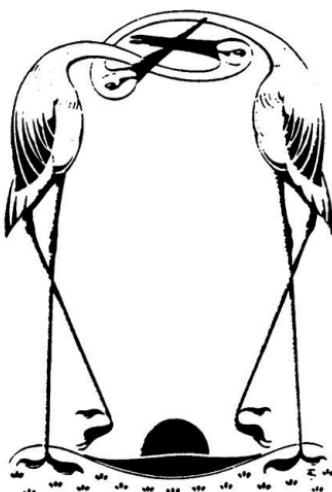
あけましておめでとうございます。

学長の帽子、いささか古びましたが、一年という歳月の埃が新年の朝日にきらめいて、実にいい気分です。

多少のポスト移動はありましたが、事務局も健在です。

会員の皆さんにもいろいろな体験をして大きく伸びてほしいと願い、書き手の席替えもいたしました。
あの枝から去る鳥に深く謝し、この枝に飛び来^{きた}った鳥をあたたかく迎え、大学構内の風通しもよくなりました。みんなの顔が新年です。

年を数えるのはよしましよう。そんなひまがあるなら句を書きましょう。「書けない」と暗示をかけてはいけません。どうしても書けない。そんな時は眠りにつく寸前まで口述筆記による出句をつづけた故・河野基樹さんを思ってください。限られた命、という点では、基樹さんも私たちも同じです。「今」は「今」しかないこと、この道は動く歩道のように刻一刻と死へ向かっていることだけは、新年に当たつてしまつかりと意識しましょう。「でもまあ」と、これが私のワルイ癖ですが、心の筋を少しはゆるめて遊ばせることも肝腎です。そんな時に名句が生まれたりするので、やめられないんですねえ。



おはようございます。

よい正月を過ごされましたか。

ゆく年くる年、去る人来る人、川柳大学のキャンパスも大分すつきりいたしました。豆まきという行事の鬼はまことに気の毒ですね、だつてあれは自分の悪を豆に託してふり撒くのでしょうか？ その的にされるなんて、鬼はほんとに迷惑千万。でも彼らは喜んでもいます。

鬼はね、豆をしつかり食べて咀嚼して、善に変えるために節分の日に出てきてくれるのです。「福は内、鬼は外！」人間とは何と勝手な生きものでしようか。

私は年中、節分の鬼でいたいと思っています。皆さんの撒かれる豆を身に浴びたい。ただし、私は本物の鬼ではありませんので、悪は悪のまんま、しつかりと蓄えることになります。

それを吐く。新子を指してヘビだのキツネだと罵るのはご自由ですが、私の吐く毒にたじろがないでくださいね。新子の毒が薄れたら、それは川柳大学の夕日。あわくつて悪の豆を投げつけてもらわないと困ります。

その日のために、どうか節分の豆をマスの中に残して川柳にすりかえておいてほしいのです。



おはようございます。

皆様、よいスタートを切られましたか。
私は身辺多事。加えて年末の大風邪を曳きずり、冴えない身を二日間、ヒコーキに乗せてみましたが、よい知恵の出るはずもなく、死ぬもせずにまた地上に戻つていりました。

すると、ぱっと視野が展开了ました。

地上には皆さんがいてくださった。遠くの人は物心共に「フレー、フレー新子！」の大合唱。近くの人は手を貸し足を貸してください。——袖に涙のかかるとき、人の情けやいやまさる、人の姿や神々し——というのは本当なのでした。

入院手術で編集長留守の「川柳大学」は、いつもにまさる熱気に溢れています。入院前の鬼気迫る編集長の仕事ぶりに、文句ひとつ言わず協力態勢を整えてくれたスタッフの面々、印刷所の方々。ありがたさに私の喉は詰まります。物言えば涙の洪水となるので黙っていますがこの感謝、お察しください。多少みつともない「編集長不在号」かもわかりませんが、これも歴史です。
さあ前へ！ 新子のつよさを信じてください。



おはようございます。

4月号が届くころは一月おくれの雛祭り、という地方もおありでしょうね。今はまだバレンタインデーが過ぎたばかり。4月号締切りの神戸は粉雪が舞う寒さです。

三月二十三日の神戸句会でお目にかかりたいと、碌郎も懸命にリハビリに励んでいます。

一月二十五日にNHKテレビで「生命を詠む」が放映され、川柳大学の面々が映りました。面白いことに、みんな自分のアラだけを気にしているのですね。私もそうで、碌郎手術前のツヤツヤに比べて何というやつれ様かと、二度と見る気がいたしません。美しく甦りたい。

同じように本誌の読み方も当然ながら「自分」「自分で、相も変わらず抜句数だけを気にしたり、一部の人が出過ぎじゃないか、などの声が届いています。私はお一人お一人をしつかりと見せてもらっています。光る一句を光らせたいための一句入選もあることをご理解ください。また、文章力も小文で採点させてもらっています。まずは原稿の書き方からマスターすることが先決です。そうして光る一句を目指して耳目を澄まし、小鳥の声や蓄ひらく音の中の、確かな自分の声を掘んでください。



おはようございます。

本日は三月二十日、五月号の締切り日。もう桜が大きく咲んでいます。神戸春句会もあと三日、ご出席ハガキをうれしく数えています。

人と人とは会うべきですね。会って失望ということはまずありません。誤解が春の雪のように溶けたり、新しい長所を発見したり、プラス面がいっぱいです。実はむかしの私は人見知りで集会ぎらいで、終刊した「展望」時代も二年半に一度しか句会を開きませんでした。

それはそれで久しぶりという感動がありました。考えてみると私も老いました。みなさんのナマの声にふれ、私もナマの声を直接伝えたいという思いが募つて、年二回東西^{とうざい}となつたわけです。

楽しく真剣な出会いにいたしましょ。そのためにはいつもポケットに「向上心」を入れて集まつてください。トイレで選者の悪口など言わぬこと。全没にひるまないこと。批評は誌上で。以上三点を守つてください。

会員は順次選者になります。選句眼、披講の態度などをゼミで研鑽しておいてください。正しい語調は難しいですが、小鳥は全国どこでもきれいに啼いていますよ。



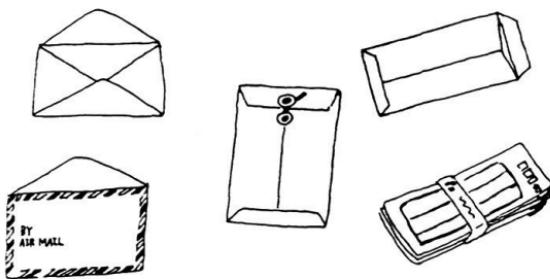
おはようございます。

通信記念日に「一日郵便局長」をやりました。櫻が肩からすべり落ちて困りましたが、実に愉快で勉強になった一日でした。

興味深かったのは押印機と区分け機。目にも止まらぬ速さで封書や葉書がベルトコンベアーで流れていくのです。押印（消印）はともかく、郵便番号を読み取つて区分けしていく賢明さには兜を脱ぎました。番号無しや位置されや乱暴な数字はどんどん除外します。それはまた局員さんの手で区分けされることになるのですが、二度手間ですね。切手も定位置に貼るべきだと思い知らされました。私もちよいちよい変な所に貼つたり、郵便番号抜きで投函したりしますので猛反省。

そこでお願ひがあります。差出し人の位置にも番号をちゃんと書いて下さいね。また、振替用紙（あれは記入欄が狭すぎますが）のあなたの住所氏名、どうぞ楷書で読めるように記入して下さいね。

葉ざくらは日増しに繁り、鈴懸の樹も一斉に芽吹きました。その成長のみごとさ！ 私たちも目を研ぎます。心を養いましょう。樹も人間も生きて等しです。



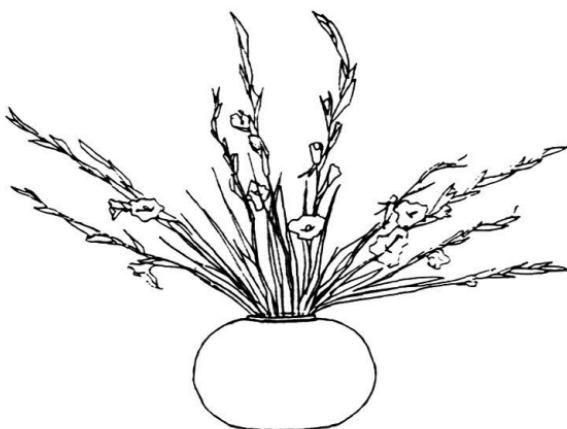
おはようございます。

降りつづく雨にサツキの花も死にました。桜のようにパツと散れない醜さを存分にさらして。この誌が出るころ、私たちはもつと残酷な花のさいごを見るでしょう。それはアジサイ。アヤメ。カキツバタ。

けれども私はあの、九月のヒガンバナも含めて、立ちながら死ぬ花の長い苦しみを、美しいと思うのです。リストカット・シンドロームが流行っています。手首を何べんも切る死への誘惑。それもさみしさ、疎外感が原因だと。他の人に見つけてもらえる場所で「切る」のは、本当に死にたいからではなくて、「私を見て！」という赤い合図だと心理学者は分析しています。

私たち、もしかして、川柳リストカットじゃないか、と思いました。お互いの「赤い合図」に気付いてあげたいものです。作品を「読む」とはそういうことではないでしょうか。「作れない」「でも書かずにはいられない」人が増えています。そういう時の句こそ素晴らしい。

技巧などでなく、たった一人の読者に心を読んでほしくて書く。私は今、そんな心境です。東京夏句会のあと一日滞在をのばしますのもそんな話をしたいからです。



おはようございます。

書評を依頼されて俵万智さんの『チヨコレート革命』を読みました。「あとがき」で俵さんは「ほんとうを伝えるためのうそはとことんつく」と書いています。そんな常識を改めて言わねばならぬのかしらと、ちょっと意外に思いました。

虚と実あつての真実。事実の報告は文芸ではないことなど、川柳界ではとっくに知っています。案外、川柳はトップを走っているのかも知れませんね。伝統を誇るジャンルほど遅れているのだとしたらお気の毒です。

映画「シャル・ウイ・ダンス」も見損ね、「失楽園」も見ず読まずですが、だから世に遅れているとも感じません。大体わかっている絵をもう一度なぞるひまがないのです。ゆとりの無さは反省していますし、だから批判もつしんでいるわけです。

小さな時間を、よき友の招きで東京湾をめぐりました。海の匂いになつかしさがこみ上げましたが、黄色い波には心が痛んだことです。黄は私の運命色なのですが、のんきな私もエコロジーについて考えざるを得ませんでした。そして私の小宇宙、只今てんやわんやです。



おはようございます。

神戸は「少年A」をめぐって何やら落ちつきませんが、目を逸らさずに考えてみたいと思っています。幸い私はメディアに発言の機会がありますので、皆さんのご意見も伝えます。どしどし事務局宛お便りをください。

さて今日は七月二十日、九月号締切り日です。加えて東京夏句会を目前に事務局はてんてこまいの忙しさ。ちなみに手古舞とは祭礼で男装の女性が山車や神輿の先駆をして舞う舞のこと。男髷に右肩脱ぎ、背には花笠、手に鉄棒のあで姿。歌は木遣とくれば私は得意中の得意です。父直伝の木遣くずしを披露しますわ、いつの日か。

暑中の出席者に心から感謝。そこで事務局も大盤振る舞い（？）出血サービスを覚悟しました。新しい試みの合点賞はゴルフ方式の自主申告で、六点以上入選の方々にシチズンの目覚まし時計を30個用意しました。特選賞は女神のメダルが12個、どなたの胸に輝くかドキドキして待ち構えています。懇親会でのクイズ賞は新子小色紙。それにプラスじょんけん賞で幻の句集『新子』を8冊進呈します。

賞賞に異論もありましようが、祭りだワッショイ！ だれが生徒か先生か、たまにはいいじゃないですか。

一九九七年九月一日

学長 時実新子



おはようございます。

一人で秋田の雑木林の小屋へ来ております。風はもとより流雲の音まで聴こえる静けさです。

病夫を神戸へ残して来たのですから、鬼の女と呼ばれても仕方ありません。が、日常のでんぐり返しという荒療治が今私の私共には必要だと思い定めて実行しました。

川柳もまた然りです。

たとえば句会で、全没をとても嘆いていた人がいました。

抜けてうれし、メダルうれしは素直です。喜ぶお姿は主催者にとつてもうれしいことです。しかし、全没がなにほどのことでしょう。句会の女神はいたずら好きで、全力投球の人ほど豪き目をみせてニンマリしたりするのです。だから悔しさはわかりますが、一日で忘れてください。次号に句会の残渣など出す未練はやめて。

一夜明けたなら一度ストンと肩の力を抜く。そして素早くあなたの穴へ戻る。沈思黙考。すると、俗気や妙な色気が落ちて我に返るはずです。なら欠席の方がいい? ノー。句会の渦をくぐり抜けた「我」は彼我が鮮明になっていきます。少し浮かれて別人だった自分を滅多斬りにした掛け句の不動心は強い。これが川柳荒療治です。



おはようございます。

螢に逢つて夏、ひがん花に逢つて秋。秋が日に日に深まつてまいります。新涼、清澄、秋冷、霖雨と、秋もさまざまな表情を見せつつ移りゆくわけですが、人の心もまた、いつも清澄とはまいません。

私も恥ずかしながら幾度も嵐に見舞われました。風速四十メートルの日もありまして、結果は今月の私の作品にあらわです。しつかり物も壊しました。猫がいたなら毬となつて蹴とばされたでしようし、犬もいなくて幸いでした。

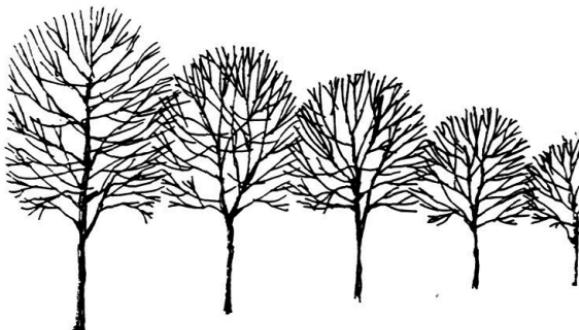
けつきよく救われたのはやつぱり川柳でした。昔から書くことで癒されてきたありがたさを今更に思いました。

その中で、タイトルにもしました「無数点」。おそらく新子語でしようが、これをみつけたうれしさ。心の中の悪を吐瀉しつくしたさいごに「あ、」と思つたのです。皆さんお一人お一人を思い浮かべているうちに、その点は面となつてきました。——涙あふれて。

一枚岩となつて私を支えてくださる人たちがいる。軽輕には死ねないと、心を立て直しました。このところ怒哀ばかりでごめんなさい。そのうち喜楽井を召しあがつて頂きます。だから、皆さんの井もぜんぶ私にくださいね。

一九九七年十一月一日

学長 時実新子



おはようございます。

相元紋太先生が「川柳は人間である」と喝破されてから半世紀。近ごろになつて「人間であることは何も川柳に限つたことではない」という声が高くなつてきたようです。それもそうですが、その執着のボルテージはやはり川柳が一番高いのではないかと思います。

そこで私は「川柳は私である」と、誤解を承知で宣言しました。「では川柳は私小説の類か」という矢がたちまち返つてきました。「はい」と答えるもよいのですが、少しだけ説明をしておきます。

「私である」イコール「主観の五七五」ではありません。「私はクローンをたくさん有します。少なくとも「もう一人の私」が存在し、その「私」が「私」を完膚なきまでに解剖する目を持つっていますので、客観の文芸でもあるわけです。主観・客観という相反するものを同時に駆使する。「そんなバカな」とあきれる人がいたらニッコリ笑つておきましょう。両性具備の化け物で結構ですと。

かつて私が「川柳は姿は俳句、心は短歌」と申しましたところ、「一体何者なんだ」と笑われました。その時もニッコリ。謎ほどの魅力がどこにあるでしょうか。



おはようございます。そして、明けましておめでとうございます。

新年号は少し太っちょで、どーんと出発いたしました。手紙形式の特集、いかがでしょうか。皆さん真剣にテーマを取り組んでいます。一発OKの人もいれば、七回書き直したという人もいます。後者は不器用な書き手かも知れませんが、出来栄えは見事です。こうやって修練することの醍醐味を皆さんも味わって下さい。七回努力した人は紅葉も終わった径を、実にゆったりと充足して歩いたそうです。

「為セバ成ル」——古い諺は生きているのですね。

アイディアマンの編集長と、ハイハイばかりで保守的な私との仲も修復しました。私は保守である反面、アイディアよりも先にダッシュしてしまった困った人間です。

今年も「新子はどこだ、どこへ行つた?」と、皆さんをお騒がせするでしょうが、なに、足は鳥籠(かご)のごとく「川柳大学」へはりついておりますからご安心下さい。

更衣もしました。いかがでしょうか。アサヒグラフ新子座のペアが作つて下さった重くて軽くて粹で深い衣の感触にふさわしい内容でありたいと、私も靴を新調しました。但し、ロングドレスの下はいつに変わらぬ素足です。よろしく!



おはようございます。

月刊誌の季節は約二ヶ月の先取りで、もう二月。どこからか水仙が香ります。

不況不況で送り迎えた年ですが、花の芽はせつせと春へ向かっています。冬眠の蛙も蛇もモゾモゾしていることでしょ。三年目の「川柳大学」に引き続いでのご支援をありがとうございます。そして新規の方々、ようこそ!

初夏、初秋、初冬。初春だけが正月を意味するので早春と呼ぶのですね。「初」って響きがよく、希望を感じます。晚春、晩夏、晚秋、「晩」はしみじみたり。晚冬とはめったに使いませんが、言葉としてはちゃんとあるのですね。

このところ私は愛称応募作品の選考を頼まれることが多くて、学園日記に書いた舞子海岸公園は「アジュールまいこ」という美しい名に決まりました。ネーミングは実に楽しい。横浜なんていいますね。「港の見える丘公園」「ベイ・ブリッジ」など、いかにも大きな夢の広がりが感じられます。

何が言いたいかと申しますと、「川柳大学」つていいな!と、今改めて自讃中なのです。名は体を表す。二十五冊の背文字を並べて抱きしめています。

皆さんも誇らかに、中身の充実に励んでください。

一九九八年二月一日

学長 時実新子



おはようございます。

このところ外出時の雨が多く。でも、師走の雨と新年の雨の違いを感じます。北国や東京の雪を案じながらも「どこかに春が」の雨です。

一月の事務局会議の日も雨でしたが、十三名の勢ぞろい。熱気むんむんはうれしいかぎりながら、トイレへ立つのも押しのけ搔き分けで、碌郎などは「箱根の山は天下の險」と歌いつつ、大きなからだをもてあましておりました。

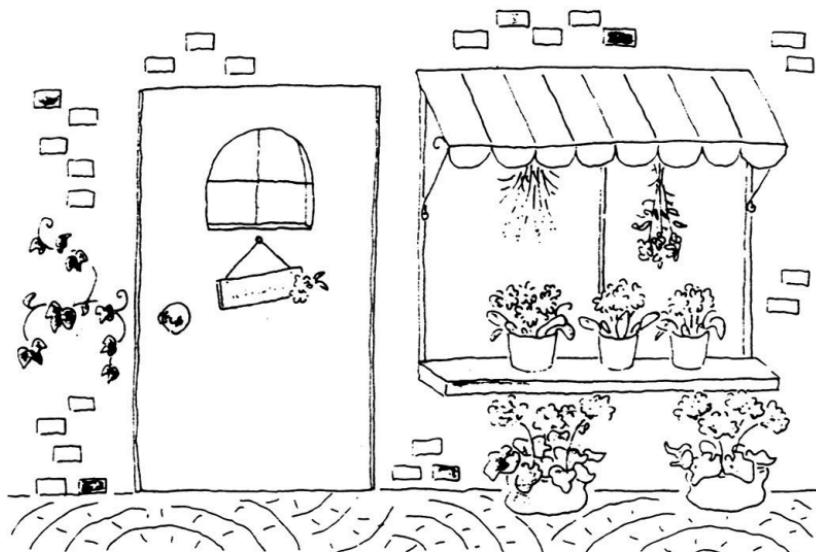
「広い事務所へ移らないとダメだな、在庫本のこともあるし」しかしこれには誰も答えず、アハハと次の議題へ。なぜならオアシがありませぬ。それと皆がワッショイを楽しんでいるフシも見えます。そうです「川柳大学」は肩寄せ合って、横を向け接吻しそうなほど狭くてあつたかい真剣勝負の場から誕まれているのです。

特集でスタートした今年。「面白くてタメになる」けれど「座談会も欲しいなあ」が結論。早いが取り柄のスタッフはさつそく二つ三つ実行に移す気配ですが、遠隔地の皆さんも東西南北それぞれの特色ある座談会を開いて編集部宛お送りください。多くの声からは多くの花が咲きます。

「川柳は私」に「川柳は花です」を追加して春を待ちます。

一九九八年三月一日

学長 時実新子



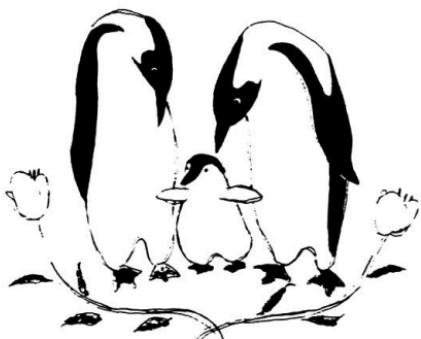
おはようございます。

梅がふくいくと香り、山々は芽吹きの季を迎えて茹でた小豆のごとくにけむり、桃の蕾もふくらんでまいりました。何よりも空の色がぐんと明るくなつてきました。

春ですね。この号が出るころは桜前線が全力疾走で北へ向かつていてることでしょう。

私は今、「けいはんな都ホテル」でこれを書いています。京阪奈、つまり京都と大阪と奈良の接点にいるわけです。神戸から大阪へ出て、近鉄なんば駅で奈良行の電車に乗り、西大寺で降りて北口からタクシー。たったこれだけのことが私にとっては大冒険でした。ひょいと外国へ飛ぶ皆さんからごらんになれば笑止の沙汰でしょうが、方向オンチの小さな一人旅はドキドキわくわく。「三枚の原稿が書ければ三十枚書ける、三十枚書ければ三百枚の書きおろしができる」と、私をかけたころの曾我サンを思い出しています。

その曾我サンは今、青森です。青森ゼミの方々に世話をかけながら大声でハッパをかけていることでしょう。リーダータイプの編集長と、油断すると穴にこもってしまう私との間断なき戦い事務局も大変ですが、それが「大学」の活力源かもしれません。死んで花実が咲くものかハッケヨイヨイ！



おはようございます。

五月、イメージは青。まなうらに風を感じているうちに、不意に五月の空にスイートピーを咲かせたくなりました。それで、春一番の吹いた日に芝生の一隅を耕して種を蒔いたんです。

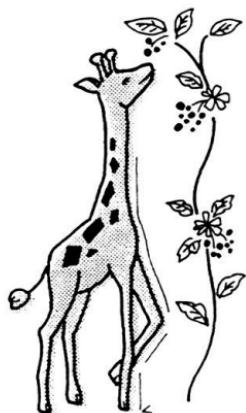
イメージとしてはピンク、白、紫とえんどうによく似た花が私の庭に咲くはずなのですが、芽の出たあたりで雀に食べられてしまうかも分かりません。咲いたらあげましょあの人いとという歌がありますよね。咲いたらあなたに差しあげます。

スイートピーは麝香連理草とも呼ばれます。連理とは一本の木の枝が他の木の枝につき、一本の木のように木理が同じになるところから「比翼連理の契り」などと使われる言葉です。スイートホームは楽しいわが家。

つまり私はスイートハートがほしくなったのかもしれません。それと、朝顔やチューリップ、薔薇などは交配によって斑の品種が多いですが、私はまだスイートピーの斑色を見たことがないのです。やさしいけれど強い花は連理にして個に生きる。「川柳大学」にもそのような人材を求めて、四月、五月と新会員を迎えるました。

一九九八年五月一日

学長 時実 新子



おはようございます。

四月半ばというのに梅雨を思わす雨。桜は長寿でしたが、これもわっと葉桜となりました。この号をごらん頂くころには船上スクールも終えて元気ハツラツの予定です。私はともかく、会員の北川弘子、谷平こころ、宮内ひろこの面々もクルージングに参加しますので、航海の無事を祈るや切なり、です。

皆さんは迷子になつたこと、ありませんか。

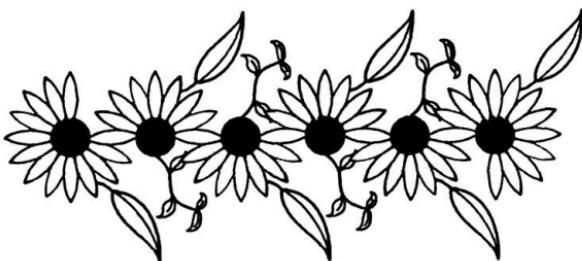
私はつい最近、神戸で迷子になりました。神戸は山と海の帯のような街。山を背にして歩けば目をつむつていてもJRや阪急・阪神の駅です。さらに歩けば港です。ああそれなのに、六甲山脈はいつのまにやら私の左側に延々とつづき、雨雲垂れこめて東西南北見分けもつかず。

私は一時間近く歩きに歩き。すると山は右側。これはもうキツネのしわざと思い、しゃがんで考えました。

はぐれるとズキンと乳房だけになる
新子

昔の句です。いまやズキンもヘチマも無く、ひりひりと靴ずれ、うつすら涙がにじみました。

八月一日二日大学神戸大会です。迷子にならずお元気でまっすぐ、湊川神社の楠の森へお集まりください。



おはようございます。

七月の日本の空を思いつつ私は今、南支那海の洋上にいます。五月四日にベナンへ飛んで乗船、七日から毎日船内で川柳教室をやっているのです。

優雅なクルーズで五七五と指折ってくれる人がいるのかしらと案じましたが、意外や意外、四十人近い人が定着して川柳の世界にどっぷりはまつて下さいました。

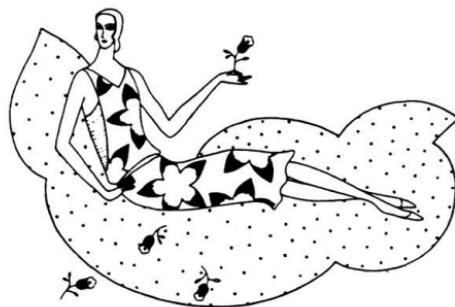
ドレスアップしてダンスやパーティー、美食に明けくれるのがクルーズだと想像していた私は、この現象にびっくりし、感謝でいっぱいです。——川柳はクルーズ族さえトリコにする魅力を持っていたのです。

うれしくなりません。だから私も一生懸命です。全十回のコースはまもなく終わりますが、新しい川柳作家が誕生する手応えは十二分にあります。北川弘子、谷平こころ、宮内ひろこの三会員がクルーズに参加し、よく私をたすけてくれました。私を含めてこの四人の川柳もいささか向上した(?)ような気がしますのも、未知なる人々から刺激を受けたからでしょう。

船はあと三日で東京着です。帰つても川柳川柳。いや実に愉しき哉川柳！ です。夏本番、どうぞ元気で。

一九九八年七月一日

学長 時実新子



おはようございます。

この号が出ますのは第五回全国大会の直前です。皆さんにお会いできると思うと、今からわくわくいたします。

さて私の「今」は六月二十日正午です。今夜はサッカーW杯の第二戦があるとかで、新聞もテレビの声も上ずつております。私の川柳選を担当している記者や編集者の中にも興奮ただならぬ人がいて「時実さんのサッカー観を伺いたい」なんて。

私の川柳観を訊いてくださればたちどころに答えますが、ルールも知らぬサッカーをどう答えればよいのでしょうかね。なんだか興奮しなきや日本人じやないみたい。いや、私も日本に一勝でもしてほしいとは人並に思っていますし、人は自由なんだから、サッカーに命を賭ける人がいても当然だと思つております。また、好奇心は川柳にとつても大切な要素ですから、これの枯渴は一大事とも思います。

この号が皆さんに届くころ、サッカーはもう遠い彼方。

実は私、そのテンションの弛みをこそ、今から案じているわけです。大きな会の前と後、後こそ大事はサッカーも川柳も等しいのです。「継続は力」を笑う人もいますが、ひよこは飛来の種子より強いことを、皆さんで実証してほしいのです。



おはようございます。

新涼の九月を思う七月二十日、神戸は雨に明けました。あと十日で神戸大会です。そうしてこの号がお手許に届くころは風も新たに、来年の横浜大会へと動き始めています。ありがとうございます。

ところで皆さん、自分の句に弄ばれたことはありませんか。私はよく体験します。句が予言してしまうとでもいうのでしょうか。だから気をつけていたつもりですが、やられました。多分、私の体力が落ちていたせいでしょう。

八月号にたしかこんな句を出した覚えがあります。

七月はみずいろ九月まで死のう

喜んだのは死神です。七月の私は半死半生でした。なに、単に夏カゼを引いただけなのですが、そのしつこさ、その苦しさ。身も心も裂けてしまいそうなのです、今も。

そこで、「咳」二十句を一気に書きました。

こんな題材は一句か二句、いいえ作らなくていいのです。でも、書くことでしか救われない私でした。見苦しさを許してください。同時に、どんな負も書く、という根性を拾つていただけるなら望外の幸せです。——九月には蘇生していると思います。あの彼岸花のように。

一九九八年九月一日

学長 時実新子



おはようございます。

第五回全国大会、東北ブロック句会、共にありがとうございます。

各位へお礼をと思いつつ、私、この夏は（熊注意ノ看板ヲ
首ニブラ下ゲタ負傷者）状態だそうで、当たるも八野の大當
たり。八月二日夜に倒れ、蛮勇をふるつて来た秋田でもカイ
口を腹にヒイヒイの毎日です。失礼の段、お許しください。
今日は八月二十日、まもなく神戸へ帰ります。

そう思えば、少しだけ異文化の、少しだけ非日常だった雑
木林の暮らしの一日一日が愛おしく感じられます。里へ出れ
ばどの家も花に埋もれています。桔梗、朝顔、立葵、虎の尾、
バラ、百日草、金魚草、菊も彩とりどり。むくげ、のうぜん
かずら。無花果や柿の実も日増しに大きくなっています。

何もないわが庭は六百坪。ミニゴルフだ、池だと碌郎はさ
わぎますが、私はこの自然そのままの草原こそ宝と思つてい
ます。露は日ごとに深くなり、踏みそくなほどバッタやコオ
ロギが跳ねる、トンボや蝶が肩に止まる、こんな極楽がどこ
にあるでしょうか。川柳も作為無き真を希求したいです。

さて神戸では皆さんの「森作品」と「桜の園」が私を待つ
ていてくれましよう。ありがとうございます。



おはようございます。

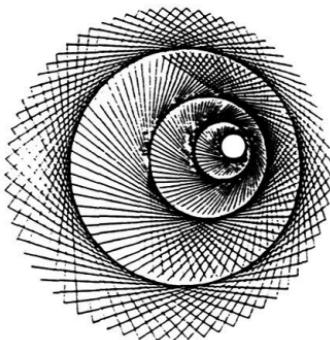
地球は確実に回り、酷暑、洪水、狂いの夏も去りました。露しげき草むらにしゃがんで、移りゆく虫の音に生きのびたいのちの使いみちを思う秋です。

日本も大変ですが、お隣りの中国では国が大きいだけに洪水もケタ外れでした。都市を守るために周辺の村々が溜め池の役目を強いられる。いつ引くか見当もつかない泥水の中で、しかし中國の人々のあの穏やかな表情はどうでしょう。諦観というよりも、悠久を受け入れる大きさに私は打たれました。人海作戦の若い兵士たちの頼もしさも大写しされました。

それで、秋草の中の思索は川柳界に及ぶわけです。

高齢化を嘆く声は相変わらずです。なぜなのでしょうか。人は生まれ育ち成人し老いていきます。これほどの自然はありません。老いた人は体力の衰退を手近の若い力に頼ろうとしがちです。ところがその若い力が最近とみに疲れてきているように感じられてなりません。不平不満の声が虫の音の中に混じるようになりました。人は老人になって初めて老人の心身の苦を知り、同時にその豊かさも知るのです。

若い人たちよ、老人を軽視すべからず。老いた人たちよ、奮起すべし。若さのみを頼む世界は浅薄に墮すでしょう。



おはようございます。

風の秋、雨の秋からストンと冬、お元気にお過ごしでしうか。「川柳大学」、今年もおかげさまで十二冊積むことができました。ご協力に感謝いたします。

このところ事務局はてんやわんやの静けさなのです。妙な表現ですが、ちょうど台風の目の中にいる感じ。それというのも原因は私で、12月号と同時進行で『時実新子全句集』の索引作りが行われているからなのです。これは実に大変な作業です。私も連日事務所に詰めているのですが、中途で「もういいから、もうやめて！」と口走ってはスタッフに叱られている現状です。コンピューターには任せられない万余の句をアイウエオ順に手作業で並べ貼付していく。一句たりとも紛失できないので風をシャットアウトした緊張の時間が流れます。疲労困憊の極みなのに、みんなの頬は輝いています。懲りない人は勇者ですね、暖色の殺氣というのがあるのですね。感謝を超えた茫乎の中で、私は多くを学びました。生きて出す全句集の恥など物の数ではないと思いました。

そんなわけで、夏に病んだ私も元気を取り戻しています。皆さんもどうかよい歳末を有意義にお過ごしください。さらなるお力を「川柳大学」に結集してください。



あけましておめでとうございます。

不況にめげず不調に屈せず、新年の黎明をお迎えのことと存じます。生かされて今在ることは兎にも角にも感謝です。

みなさん、正月の大地に立つて深呼吸しましょう。

男性に比べて女性は腹式呼吸が苦手ですが、肺呼吸では追つかなくなりました。なおやかな女句がリードしているかに見えますが、リードしているのは男女を問わず腹式呼吸の句だとということに気付きました。

さあ、ご一緒に始めましょう。

まずおなかを凹ませて口をつばめて息を吐きます。吐けるだけ吐いてください。苦しくなつたら息を吸います。おなかをふくらませながら口を閉じての鼻呼吸ですよ。ほら、ぱらぱらと句が降ってきたでしょう。

目は自然につむっていますから、あるのは「自分」という名の小宇宙だけです。「常識」が散つていきますね。とてつもなく大きな宇宙です。「遊び」をせんとや生まれけん……ハメを外してみませんか。今年は少し、今、少しだけ。外へ出れば目もくらむ世紀末です。目を常識に戻して働くねばなりません。一日のうちでほんの瞬時の「遊び時間」が持てたなら、それはあなたの宝です。川柳の泉です。

おはようございます。

私はアサヒグラフの「パイプのけむり」の愛読者ですが、その團伊玖磨さんがテレビで話していらっしゃったことがとても印象的でした。

夫婦に限らず、人と人は分かり合えないのが当然だと。

そうですね、人間、誰一人として同じ人はいません。一人で生まれて一人で死ぬ。なまじ分かろうとするからマサツが生じる。ずいぶん孤独な考え方ですが、半端な理解をされるよりは「異なる個」として扱われたほうが楽かもしれません。

もうひとつ、「嫌いなものが好き」とも言つておられました。たとえば食べ物にしても、トマトとタコ酢は作るなよと奥様に命じながら、外ではもりもり召しあがるそうで。

まあ團さんを風変わりなお方と見るのは簡単ですが、「嫌いな物を食べる、食べた時、ものがなしさと愛しさを感じる」に、私は共鳴しました。対人関係も同じだと思つたからです。書き手と読み手にも通じます。

この号が出るころ、私の『全句集』も人様の手に渡り始めます。出版記念会に出席してくださつた方々は、否応もなく重たい大冊を提げてお帰りです。——思うだに身が竦みますけれど、もしもその中に「ものがなしさと愛しさ」を感知なさる方がいたら、私は嫌われて本望です。



おはようございます。

雪国のみなさん、お元気ですか。神戸も北風が骨に沁む一月二十日です。全句集出版記念パーティーを四日後に控えて寧日なきこのごろですが、思いは三月へと飛んでいます。

今日は心のお話をしましよう。

「元気」「元氣」と言つたり書いたりしてはいけません。

先 日來の風雪も「暖い冬だね」「おせちが腐っちゃう」などの声を聞いて神サマが冷氣の袋をひらいたのです。「元氣です」「そうかい」と風邪の神が袋を全開にしますよ。夢を語れば消えるのと同じです。心の中で「元氣」を呼ぶこと。神サマは本来へソ曲がりで、わいわいが嫌い。一人でそつと「元氣」を呼べば、からだの中へ来てくださる。

何もしないでくよくよはいけません。惱むより行動です。

動けば心は従いてくる。頭を抱えていても川柳は釣り坊主。一句をまず書くのです。するとすらすら、井戸の呼び水と同じですよ。実行してみてください、一人でそつと。
 「老人力」という妙な言葉が流行しています。赤瀬川原平さんの本が出所で「ボケた」「忘れた」「とし取った」を逆手に取つた新語らしい。心の中で連呼すれば「おお！」と神サマが若人力をくださる、かもです。一人でそつとよ。



おはようございます。

もろもろの嵐が過ぎて春待ちの静けさ。碌郎は雪の秋田で、私は芽吹きの神戸で、それぞれが皆様への感謝に瞳を濡らしております。改めて厚く御礼を申しあげます。

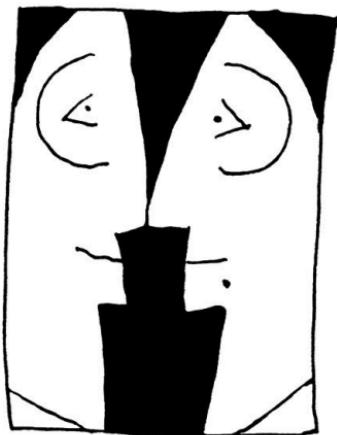
某日朝、テレビを見ながら珈琲を飲んでいますと国語学者の大野晋氏がいいお話をなさっていました。いつもならうちの宿六・碌郎の目覚め時でテレビどころではないのですが、ルスのありがたさ(?)です。

メモを取るのを忘れましたので記憶定かではありませんが、日本人が日本語をあいまいに使う傾向を憂えて本を出されたそうです。(『日本語練習帳』岩波新書) 単語の持つ意味を正しくとらえて使わないと、さなきだに複雑な日本語は外国人にも誤解を招くと、二つの例をあげられました。

「最良」と「最善」にしても良は質のよしあしの中からもつともよい良。善は善人・善行などに見られるごとく、心や行いのよしあしの中の善。「実におもしろい」「とてもおもしろい」もいいかげんに使っていますね。「実に」は実体験から発せられ、「とても」は程度(感性)差の表現。うーん、と教わりました。コトバがいのちの私たちです。最善をつくして最良のコトバ選びをしたい。とてもいい朝でした。

一九九九年四月一日

学長 時実新子



おはようございます。

もう五月だなんて、月刊誌の船脚の速さに一驚です。こうして早く生よ終われとねがう反面、一木一草、殊にも夕日昇月の美しさに惜命ただならぬ。とりあえずは一日を、せめて一刻を身に恥じぬようによと思はばかりです。

さて、いまさらの感ですが、短詩文芸は作り手と良き読み手によって生命を得ます。このドッキングの成功は相互の至福。弄ばれて死ぬ句は憤墓の慟哭。感性の差異はどうする術もないのですが、感受する力は作句力と並行して育つていくものです。焦らないで、鑑賞力を養ってください。

おかげさまで本誌それぞの「読む」はそれに実っています。「分からぬ」という先入観を外す、少しでも作り手に近づく、愛情をもつて読む。この三本の柱を書き手が守つていてくれるからです。もちろん、作り手サイドの未熟ゆえ難解句となつているものも少なくありませんが、今は批判よりもまず選んで読み、「生かすために」読んでほしいと願っています。——それでは物足りないと、辛口批評を望む声もありますが、ではあなたに確たる川柳理論、文芸批評の力がありますかと問いたい。一知半解、的外れの批評が作者をころした例を私は多く知っています。先決は「読む」です。



おはようございます。

六月は雨。二宮宏子さんの「弱いから若くないから雨が好き」という佳句を思い出します。

「若くないから」は自然に出てきたい言葉。自負もあり、含みもあって、平凡なようでなかなか味のある言葉です。

「子供叱るな来た道じや、年寄り笑うな行く道じや、つて言いますよね。いきなりの老人なんていないんだから」という話になりました。すると、

「それがいらっしゃるんです。ほく、会いました」とおっしゃったのは朝日放送の道上洋三さんです。

「そのお婆さんはね、生まれながらのお婆さんなんですよ」「そんなバカな」

「いやホント。ご自分もそうおっしゃってるんだから」「? ?」

「つまり、今が一番心地よいって。若いころの話や老いたグチなんて一切言わない。生きてきたプロセス無し。気がついたらキレイなお婆さんだつたつて」

私はキツネにつままれたような感じでしたが、ふと、わからが小野多加延さんを思い出しました。「若くないから」が自然に言える、そんな私になりたいと学びました。



おはようございます。

五月の窓辺で七月をイメージしています。白、青、海、イメージは山から海へ、それが七月。昨年の今ごろ私は南の海を走っていました。スカーフに海風をいっぱい受けて、爽やかなクルージングでした。

川柳大学も四年目の波を蹴立てて順調な航海をつづけています。幸せは、ふと怖い。どこかに妬みの黄色がひそんでいるかもしれない。しかし、私の乗ったあのパシフィックビーナス号が船長もおどろくほどの快適な旅を終えたように、大学船内のどこにもその影は見えません。真実一路です。

ただいま事務局では数々の企画をたて、一つ一つを確実に消化しています。原稿募集、夏の東京大会、二〇〇〇年一月一日発行予定の『現代川柳秀句館』などなど。どれをとつても皆さんのが熱い意志と協力なくしては成らないものばかりです。「打てば響く」川柳の筋を、私の耳はうれしくキャッチしています。

けれども個は個。響かない人も少数はある。あの船室に群れを嫌つて一步も出ない人がいたように。私は今、その人たちの一人一人をじつと見ているのです。自由意志を尊重します。決して私の手で花を海へ散らすことはありません。



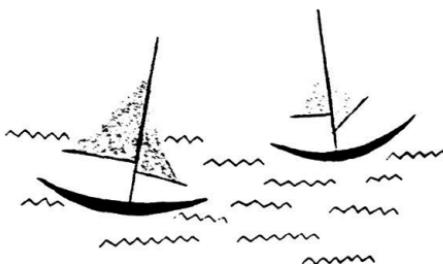
おはようございます。

気分は八月、身は六月。草も木も毛深さを増しています。私も毛深い娘だったのですが、老いてつるつるの身を今はとても気に入っています。職業柄のペンだこ、ヒジだこ、すわりだこは私の勲章です。

さて、身の点検も終わつたところで合同句集のための選句をさせてもらっています。すでに自選の五十句をさらに半分にする。するとムダ毛が取れてピカピカしてくるんですね。うれしくて、この句集を出したなら、次は誌友さんも含めて大大大句集をと夢見ていました。「ひとり」もいいけど「みんな」もいいと思うようになったのも、肌つるつるのせいでしょう。すべり合う心地よさです。混然一体のにんげんの詩の芳香です。

人はまず母を通して人と会い、ながくつきあい、さみしい人はペットを飼い、花をいつくしみ、土に飽きたると石を愛でるようになると申します。つまり、人・動物・植物・鉱物と嗜好が動いていく。「逆もあり」じやないかなと考えました。若いゆくにつれて、私は人がだんだん好きになる。

海もいい山もいい石もいい。しかしあの、生きながらの冷たさ。動物や人の冷たさは死のサヨナラの時だけですもの。



おはようございます。

大予言の七の月も無事通過して九月、と申しあげたいところですが、本日はまだ七月二十日。油断はできません。少女のころからノストラダムスを信じて、結婚もせず子供も産まずに来た人がいらっしゃるそうです。これも一種の美学でしょう。

昨年の夏は神戸大会直後に救急車騒ぎを起こした私。今夏は自重しようと思っていたのですが、引越し騒ぎでまたまた周りの人たちに大迷惑をかけてしまいました。その上に急に歩けなくなつたのです。あと十日で引越しという朝、目覚めると右足親指の付け根にピンポン玉がくっついているじゃありませんか。私は目を疑いました。痛みは脳天を突き抜けます。ウオノメにバイキン。「切れ」「切りませぬ」と碌郎と喧嘩のあげく、私は「自分で手術」を思い付きました。

赤いピンポン玉が白くなるまで三日呻いて待ちました。そして決行したのです。詳細は「サンデー毎日」に書きましたので興味がおありでしたら読んでください。
（成セバ成ル）なんて偉そうな事は申しませんが、現在作句不調のお方はぜひこの「自分で手術」を実行してみてください。かならず歩けるようになります。



おはようございます。

東京大会とてもよい会でした。ありがとうございました。
東京から秋田へ。事務局を守ってくれているスタッフの皆さんに厚くお礼を申します。

引越し、大会、秋田とあわただしい八月上旬でした。皆さんに援けられて、誠意をたくさんいただきました。人に会うことの大切さ、うれしさも胸にあふれました。
さて、お詫びです。

前号で私は「自分で手術」なんて偉そうなことを申しあげましたが、あれはまちがいでした。秋田へ来てから例のウオノメがふたたび活火山となり、その痛さ脳天を突き、呻き声は雑木林にひびき渡るありさまとなりました。

8月12日、耐えきれず近くの医院で小手術を受けました。
「ここまで我慢するバカは見たことナイ」と言われました。
「自分で手術」は自分を甘やかして深部をえぐることができず、ふたたびバイキンをはびこらせてしまったのです。
こじつけのようですが、川柳も時宜をはかつて良き師のアドバイス（手術）を受けられるよう、お薦めします。餅は餅屋、病気は医者、川柳も同じなのでした。——でもまた、私の足は私流に歩いて私ノ目を作るでしようけれど。



おはようございます。

人間共をわらうかに、空も海も山野も秋になりました。秋は距離なのですね。ある朝、碌郎が「映画を見に行こうよ」と言いました。「エリザベスでしょう、行かない」と私は答えました。見もしないで「いや」もないのですが、黒澤の「乱」が頭をよぎつたからでした。

碌郎はスペクタクルが好き。私は「終着駅」のような男と女のわずか数時間の深い穴が好き。私たちにも春の季節や夏の日盛りもあって、そのころの私は碌郎に逆らったことがありませんでした。「乱」も目をつぶつて耐えた映画です。

私たちもすっかり秋、それも晩秋。やつと「ノー」と言える私になれました。けれどもこの爽やかなさみしさは晩秋そのものです。やがて冬。冬になればまた距離はちぢまるでしょう。

みなさんもそれぞれの距離を感じていらつしやることと思います。作句のチャンスです。恋人とちぐはぐ、友人は別の友人と紅葉狩り、子は異星人、夫とはぎくしゃく。すべて放つておくことです。逃げない川柳だけを愛し、ひとりの空間を大切にしてください。あ、親御さんからは目を離さないでくださいよ。介護期に感謝して、それも川柳にしましょう。

一九九九年十一月一日

学長 時実 新子



おはようございます。

神戸にはまだ「夏」が残っていて秋浅く、十一月号のごあいさつがためらわれますが、北の国では時雨や雪のたより。もう冬のさなかのお方も多いでしょ。

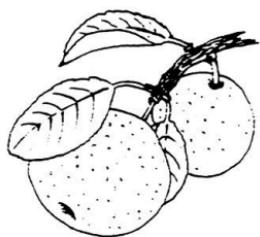
今朝、すばらしい空を見ました。

碧空をバックに、ピンク、オレンジ、イエロー、ブルーにグレー、彩とりどりの雲が綾なして、それが朝日に輝くのですよ。見惚れつつ、私はふと思いました。改良に改良を重ねて作られる薔薇の彩は、きっとこの自然の雲に魅せられた人が真似したにちがいないと。

すると薔薇は怒るでしょう、「雲がわたしの彩を盗んだのよ」と。そうなのよね、たとえば街で同じレディーメードの洋服の人とそれちがつたりするとお互に不愉快ですものね。川柳も共通語の組合わせの短詩ですから類似は避けられません。あまりにそつくりだと先人に譲るのがルール。雲だ薔薇だと言い争うのはみつともないことです。さらにいやなのはコトバも内容もちがうのに、口調というか仕立てというか、何となく姿がそつくりの句と出合った場合です。これも偶然といえばそれまでですが、ひやりと口惜しい。そんな時は一眼散に逃げて、次なるオリジナルに挑戦することです。

一九九九年十二月一日

学長 時実新子



あけましておめでとうございます。

二〇〇〇年元旦、たぶん何事もないとは思いますが、水だ口ウソクだ、七輪まで用意しろと言われると、つくづくと機械文明の不便を思いますね。一九〇〇年の夜明けのほうがどれほどか心は豊かだったろうと思います。

天は怒り、地は裂け、人は愚かに戦をくり返し。しかし、未知なる新世紀への期待は「光」に違ひもありません。いのちを繋ぐということは「光」無くしては考えられないゆえに、何とかバトンタッチしようとする本能が見る「光」です。

この、生きるかなしみを、私たちは「川柳」に託す。小さくて大きな力を信じたい。せめて二十世紀の掉尾を飾る川柳を書き残したいと念じます。

話はころつと変わりますが、このところ巷に溢れる趣味の切手を皆さんはどう思われますか。楽しくて面白い——ですねえ。差出し人のセンスもうかがえて、あれこれ楽しめる。心と心を結ぶ小さくて大きな役目は川柳にそつくりです。ところがこうも多彩が溢れると、通常切手がパッと新鮮に映るから不思議です。川柳も同じではないでしょうか。はがきも同じ。あの紙質、あの適当な大きさに、私は感動してしまいます。今年は通常切手、官製はがき式川柳を志したい私です。

二〇〇〇年一月一日

学長 時実新子



おはようございます。

も早、どこかにそこはかとなき梅の香り。二〇〇〇年、何となく私も二〇〇〇年生きた気がいたします。

先日のことでした。白線の内側で電車を待っていますと、

「まもなく大阪行直行特急が入ります」とアナウンス。めつ

たに電車に乗らない私は「直行」に慌ててしまい、横の男の

人に「この電車、芦屋に停まりますか」と尋ねました。

男の人は「さあ?」と言うが早いか運行表示板の下まで走つ

てくださいました。それで彼は座れたはずのところを立ちはだ

なり、それでもまだ車内の停車駅表を眺めていらした。そこ

へ車内アナウンスで「御影、芦屋、西宮、大阪に止まります」。

その時、私を振り向いて「よかつたですね」というふうにウ

インクした眸のやさしさ。彼は御影下車だったのですが、降

りる時にもにっこり。私も「ありがとうございました」とお

礼のおじぎをしました。



たつたそれだけのことですが、車窓の陽光ぱつと明るく、「生きていてよかったです。もう少し生きていたい」と、私は思いました。恋人からも夫からも息子からも、もらつた覚えのないあの微笑。私もたまにはあるような美しい句を生みたいと切実に思つたことです。あの方は男姿の観音だつたかも。

おはようございます。

まずは事も無く二〇〇〇年は動き始めました。何となく新世纪という感がありますが、今年こそ世纪末。ゆだんしないで棹尾を飾ることにいたしましょう。

私、思うんですけどね、二〇〇〇年を跨ぐということは貴重な体験だと。そして、二十一世纪でもなく二十世纪でもない、この珍しい年には、思いもかけぬ事が起きるんじゃないとかと。椿事無かれ夢多かれと祈っています。

たとえば過去の天才たちが戻ってくる。中世の誰彼にも会える。そんな気がしませんか。二十世纪末の機械文明はいよいよ勢いを増すでしようが、そのメカニズムを縫つて、すり抜けて「にんげん」の復活がきっとある。うんと個人主義になる。川柳にとつては最高の年になる。

「待つてました！」と声に出したとたんに、私の三月号作品が湧き出でてきたわけです。来訪者の一番手は西東三鬼氏。彼はまだ神戸に住んでいたのですね。ショパンもモーツアルトも、ゲーテまで。押すな押すなで、私の小さな部屋は満杯。

皆さんも耳を澄まし、瞳こらしてみてください。
二〇〇一年には死んでもいいけど、この二〇〇〇年だけは
私、生きていたい。何となくそう思います。

二〇〇〇年三月一日

学長 時実新子



おはようございます。

（四月だかなんだか弾け飛ぶボタン）芳賀博子の一句を思いつつ、戻り寒の中です。

東京行きがつづきました。福井の列車も雪でした。生国に雪のない私は雪が珍しい。車窓に鼻をくっつけて、降る雪、積む雪、照る雪を見ました。匂いも嗅ぎました。雪を句にしたいと思いました。

降る雪は心の乱舞、積む雪は犯しを誘い、照る雪は死を忘れさせます。いろいろとメモしましたが、恋の時代に作った（雪中の一軒焼いて遊ぼうよ／照る雪道 罪なにほどの前かがみ）などが邪魔をして、一句も得られませんでした。皆さんもそういうことがおありでしよう。つまり、我が敵は我にありで、超えることは至難のわざです。

詩人も俳人も歌人も第一作品集が賞讃されがちです。私たちの川柳も例外ではありません。昔は「処女句集」と呼びました。初心のういうしさが読者に心地よいのでしょうが、その作者が育ちゆく過程や老境の真を読み取ることの大切さを思います。作句また然りで、若きわが句にとらわれているのは愚かなことです。現在地からの発信をおそれてはいけない。（犬逃げて男が逃げて雪晴れる）東京駅で立つて書きました。



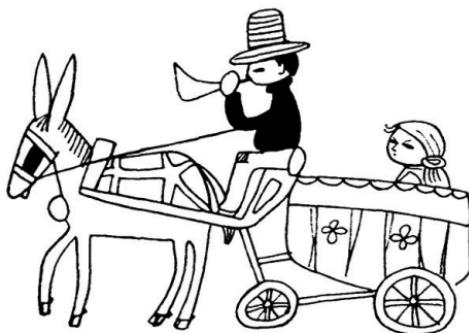
おはようございます。

五月、青、風、五月誕まれの方々を祝します。ちなみにた
だいまは三月、春の彼岸前。三月誕まれは美男美女。一月二
月四月、知りたい人は申し出てください。

このところ、句が作れないという悩みをよく耳にします。
作れないなら作らなきゃいいのよ、とお返事すると、ぶつと
ふくれる。だって、そうでしょう。前にも何べんも申しあげ
ましたが、壁とかスランプとかは妄想です。無いの、そんな
もの。有ると言ひ張る人は心の安穏を求めていて、善人でい
ようとして、それがカベという名になつて立ちふさがつてい
るだけなのです。卵の泡立て器ね、あれで二、三回搔き回せ
ばふつとびます。「ウツ」？　はい、いい材料に恵まれまし
たね。「悲しいから」？　まあそれはお気の毒。中途半端で
なく、とことん底まで悲しめば浮上します。

と、えらそうに言う私も、一ヶ月まったくの不作でした。

前に、外出から戻るとぐつたりして「ああ、お勤めしながら
川柳作る人はすごい」と感服しましたが、今回はからだじゆ
うに湿布でミイラになり、あ痛タタで川柳どころではなかっ
たのです。私はひたすら時を信じることで自然治癒しました。
コツは「とことん」です。作る作らぬ死ぬ治る、すべて。



おはようございます。

今年は桜を満喫いたしました。この号が出るころは青葉若葉の候ですね。日本って何と素晴らしい四季の国なのでしょう。人間共の悪事は後を断たず、不況からの脱出もままならぬ世情ですが、しかし、花がある、緑がある。風が吹き、太陽は照る。足下のタンポポにも「ありがとう」と言いたい。

「どうしたの？ 学長、しっかりしてください」

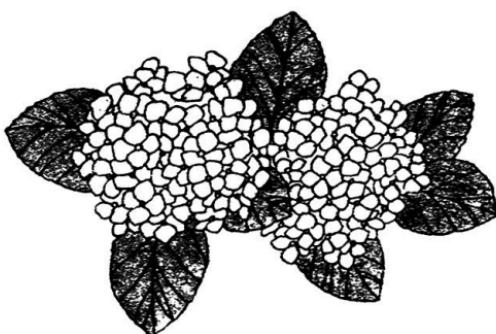
いえ、別に、私は「ホトケのシンコ」に化けたのではありません。ただその辺をぶらりと歩き、足を伸ばして山の桜と川べりの桜並木を抜けてきただけなのです。

もうひとつ、戻ると机上に会員のKさんからの手紙がありました。Kさんは今、闘病中なのですが、「検査も終わり、やつと落ち着いています。どん底までいくと人間はどう生きようかという意欲がもてるのですね。この難局をどう川柳にしたらよいのか。悲嘆もいやだし、元気ぶった嘘もいやだし、むずかしいけれど頑張ってみます」と書いてありました。そういうして渾身の十句が入っていたのです。

私の「ありがとう」の涙。それから、いわゆる私の「暁の祈り」を当分のあいだKさんお一人にしほることをおゆるしください。皆さんもKさんの全快を信じてください。

二〇〇〇年六月一日

学長 時実新子



おはようございます。

五月薫風とは申せ、25°Cという日もあつて、梅雨の川を跨げばすぐに七月です。みなさんお元気でしょうか。

この春以来、私の小さな本のことと一方ならぬご厄介になりました、ありがとうございます。「仲間」のあたたかさをつくづくと思い、感謝で胸が熱くなります。

川柳にまったく関係のない仕事も数々ありました。たとえば講演で、顔の筋ひとつ動かさない集団に出会ったときなど、打てば響く川柳仲間のありがたさを思い知りました。

すり寄つてみたが虎には虎の妻（篤子）

ふんふんとお好み焼を裏返す（文子）

など、ユーモア句を次々掲げてみたのですが、笑わない。

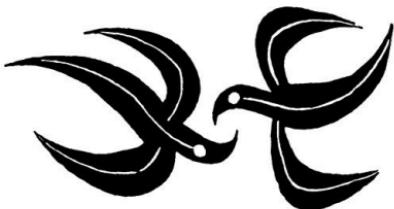
「あのう、みなさま、笑っちゃ叱られるのですか」と、ジョークをとばしても能面のまんま。

私は泣きそうになり、感動秘話を持ち出してみたのですが、泣かない。——戻り道で、川柳仲間の感情の豊かさを改めて痛感しました。

まあ、豊かすぎてモメゴトも折りありますが、ケンカはぱっと派手にやつて、恨みを残さないようにしますが、私は残しますが不、が今月の新子20句。日常と文芸の差です。

二〇〇〇年七月一日

学長 時実 新子



おはようございます。

梅雨晴れの日射しはすでに八月を思わせて、光陰まさに矢のごとしです。

コーヒータイムにたまたまＴＶで「夏目漱石」を見ました。ロンドンへ留学した漱石は神経衰弱になります。英語の研究が何になる、英國の文学も日本人が感動できないものばかり。帰国して東大で英語を教えても不評。そんな中で漱石は留学時代に彼の手紙を楽しみに待ちつつ死んだ子規を思い出すのです。自分が書いた物を待つていてくれた人がいる。子規は漱石のたった一人の読者だったのです。試みに「ホトトギス」誌へ「吾輩は猫である」を書くと大評判で、読者がわっととびつきます。「何か書かないと生きている気がしないのである」と悟った漱石は、東大教授の職を辞して小説家になる決心をしたのです。読者の存在が自信となりました。かの「坊っちゃん」は十日で書き上げたそうです。漱石は言ひ残しました。「ありのまま気取らないで書く」「道は自分のツルハシで掘り進むべきでしよう」と。

一冊を十二日で書いてしまう私は、自分の速筆と内容のお粗末を常に恥じていますが、内容は雲泥の差としても、どこか大文豪に似ている性格にニッコリ。皆さんも一緒ですよ。



おはようございます。

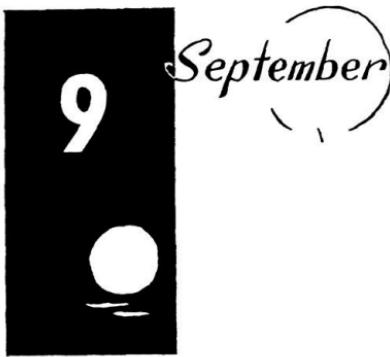
「夏」という名の投網を打つて、その水しぶきがもう秋だなんて。でも、矢のごとし！ と、ほーっと見送っていたのは、漁はボウズとなりますよ。歳月が矢なら、自身も矢になつて飛ぶしかありません。

しかししかし、「時」をゆつたりと使う名人もいらっしゃいます。「いそがしいは心を亡くすこと」は寂聴説法だったかしら（そんなことみんな知つてまーす、と言つた私はにらまれました）。「いそがしいと言つたら敗け」といつた意味の発言は林真理子さんだつたかしらん。

林さんなど超いそがしい中、のんしゃらりとお洒落を楽しんだり、オペラだのフランス料理にアタックだと、ホントに生きる達人。『美人入門』もベストセラーですつてね。

私は、田辺聖子さんが七十歳になられた年だつたかに「元氣ですけどふしぎな疲れをふと感じるわ」とおつしやつたのが救いになっています。七十二歳になられた今年の新聞紙上では、また「元気快復」と。それも力になつています。

今、『三岸節子修羅の花』（林寛子著・学陽書房）を読んでいます。好きなように生きた人の美しさ。私たちもうかうかしないで、川柳の花を咲かせつづけましょう。



七月三十日の大会、ありがとうございました。回を追つて充実の集いをとてもうれしく思い、力をいたしました。

八月一日から碌郎とともに秋田へ来ております。日中の暑さは皆さまのところと同じですが、朝夕はさすがに涼しくてほっと息をつきます。お盆を過ぎると、急な秋。秋を待ちつつさみしいという感覚は大会の余波かも知れません。

9月号の初校・再校・念校、10月号の作品受け付けと、事務局はてんてこ舞いの忙しさ。それと思うと申し訳なさと感謝でいっぱいです。親孝行なスタッフに恵まれ、それを支えてくださる全国の会員・誌友各位に改めて最敬礼です。

碌郎は終日山を見、樹々と話して穏やかな顔をしています。村の人々とも「やあ来たか」「どうも」と和やかなものです。

私は石垣健さんとお手伝いのアッコさん以外、まだどなたともお会いしておりません。健さんは一対一の対談テープを採りました。「なんたって転んでもただで起きねンだから」と、健さん大弱り。ハハハと、男性作家総まくり。ご期待ください。サツさんは酒店が忙しく、恭雄和尚も病院から寺へ戻られて盆経の由。「えがつた、えがつた」の秋田羽後町林の中の白い家です。秋はそこ、皆さんのご健吟を祈つて。



おはようございます。

猛暑の旱を嘆いでいると「そうか」と大雨。台風、竜巻、噴火と地震。各地の皆さま大事ございませんでしたか。

神戸も坂の街ですから、道はたちまち急流の中、下駄を履いて情報ビルへ。神戸市主催の「男女共同参画推進月間」のイベントのひとつヘジエンダ一川柳の選をしに行きました。待つこと一時間、神戸にもいわゆる“地方時間”というのがあったのですね。市役所から三人、大阪からM女史が参加なさった。「M先生ってどなた?」「かの有名な……」「存じあげませんが、もしかしてフェミニズムの?」「ウイ」。

私はあわててメモに「□をつつしむこと」と書きました。

でも、M女史はカラフルインコのことき茶髪の気さくなお方で、「ウイ、ウイ」と、川柳作家である私の主張を素直に認めてくださいました。フェミニズム=苦手というのはいけませんね。どの世界も、男も女も、個人差があるだけです。母性ゆたかな男もいれば父性ゆたかな女もいる。適性を發揮して楽しく共生することです。

その日、タクシーに傘を忘れた私は、「□をつつしむこと」なるメモも卓上に忘れて戻りました。皆さんも、事、川柳に關しては、□をつつしむことはありません。



おはようございます。

猛暑からいきなりの秋で、窓から窓へと風を通した日が何日あつたでしょうか。北からの便りはもう冬で、その間も日本があちこちが揺れづけ、山は噴き川は怒り、いやはや心安まる日とてありません。

そうして川柳大學も12月号の編集に突入です。この一年間も、ありがとうございました。よろこび、かなしみ、いろいろとありましたが、まずは大過なく新世紀の橋を渡れそうです。みなさまの協力あってこそ、私の今日に感謝致します。

ミヤコ蝶々さんが亡くなられたテレビのコメントで、桂米朝さんがおつしやっていました。「とにかくいそがしいお方で、安心という日はなかつたんとちやいますやろか……」。

「あんたもはたらきすぎだ」と碌郎が申します。どこかへ行く車中、どこかのホテルでさえ、原稿用紙を取り出す私は、同行者から見ると仕事の鬼かも知れません。恥ずかしいことだと私は思いました。書いているところなど家族に見せてはいけないのでした。娘のまどかもいつだつたか、「シンコさんはそこにいるけど、私に母はいませんでした」と言いました。——では、どうやつて生計をたてればよいのでしょうか。エンピツと私、途方にくれています。

二〇〇〇年十二月一日

学長 時実 新子



あけましておめでとうございます。
「森」は愛に充ち、札は名刺に託しての新年号です。ご支援
に対し、心から「ありがとうございます」を申し上げます。

五年前、私はうつすらと思つていました。二〇〇一年に私はこの世にいるのかしら、と。「いるとも」と思う日と「いないよ」と思う日がちらつく中で、新世紀の橋を元気で渡ることになりました。

「憎まれつ子世にはばかる」は、けだし名言。一人で笑つてから、しつかりと真顔になつています。この世にいる以上、私は川柳に生きていきます。川柳をいのちとして生きる以上、もつとも大切なのは「川柳大学」です。
「毎月きちんと届けてください」と、よろこんでくださる皆さんを信じます。信じないで、どうして「川柳大学」を生みつづけていけるでしょうか。

涙があふれます。もちろん、うれし涙です。

私の力が衰えたとき、「ハイよ」とバトンを受け継ぐ力を一人一人が蓄えてください。その力も信じております。
新年に向かって、私は祈りました。そうして倍のいのちをいただきました。「憎まれつ子」は、今年も元気。皆さんもハツラツと川柳に生きてください。



おはようございます。

世の中はＩＴ革命とかで、情報はあふれ、猛スピードで狂つていきます。そんな中で心澄ますのは大変なことです。

でも、だからこそその五七五ではないでしょうか。

私たちは一人一人、小さくて大きな「自分だけの世界」を持つていて。その幸せを改めて思うのです。ＢＳデジタルにも勝り、ハイビジョンにも劣らない「鮮明な私」を誇つていると思います。

南極の一日は一年だそうです。だとしたら、あつという間に一年が過ぎる、あくどうしようでムダにする一日の、何と勿体ないことでしょう。私たちは南極的に言えばこの年だけでも三百六十五年も生きるわけですから、有効に使えば、かなりのことができるはずです。

自分でゴールの日を決めて、これまた、あくどうしようとうろうろする引き算人生は、すでに死んでいるのと同じです。ゴールの日は決めなくとも、ストンとやつてくるのです。そのとき、なるべく機嫌よく、「ああ面白かった」と思えるように、一日一刻を大切にしましよう。川柳が出来ないはウソ。心が澄めば心が見えます。井戸ざらえして、しっかりと自分を見る。——以上、私へのいましめです。



おはようございます。

大雪の中に水仙が香ります。梅も桃も桜も「咲く日」へ向かって思いを育てています。私の好きな春がやつて来ます。四季のある国に生まれた幸せを、つくづくと思う季節です。人にも四季はあるのですね。人生はもとよりのこと、からだの中にあるのですね。

私は「冬の人」と暮らしています。冬の人はシビアでウソがつけなくて、雪という名の大ぶとんをかぶつて籠つてしまっています。ふとんの中にはその人だけの世界があつて、誰も入れようとはしません。——ところが、冬の人は意外に人が好きなのです。とつぜん自分をコタツにして「みんな集まつてほしい」などと申します。やさしい春の人や、少しさみしがりやの秋の人や、原色の夏の人たちが来てくれます。冬の人はいつぺんに機嫌がよくなつて、湯気が立つほど喋ります。コタツが喋るので、みんなはミカンでも食べるしか手がないのですが、聞き上手は話し上手、短い合いの手を入れながら豊潤な時が流れるのです。思いもかけぬ前進があるのです。そんな事務局会議の日を一月はとうとう持てませんでした。倒れた「冬の人」の傍らで、私は春夏秋冬に化けながら長い長い冬を過ごしましたが、もう大丈夫です。春ですもの！



おはようございます。

花の季節がめぐつてきました。テレビは小説よりも奇なる世界を映しています。これとどう関わっていくか、と折ふし考え悩みながら、この世の旅がつづいています。

シビアになれば身のおきどころなく、ニヒルになれば生きながら死んでいるのと同じです。だからといって、好奇心で五七五に書き残すだけの価値あるニュースとも思えません。世にヌスピトのタネは尽きまじ。まつりごとの悪も尽きまじ。いちいち関わって正義の味方ぶつていると、つくづく自分がいやになるでしょう。

私たちの川柳はそのような浅いところには存在しない。究極は「私から私へ」の、うそいつわりのあるメッセージです。一人一人がそれを果たせば、二〇〇一年の川柳は魅力あるものになります。「身勝手」を貫いて思いきり翔ぶのですよ。

川柳は時に、予言者ともなります。

たとえば私は、「去る日へ器用咲かせどんな事にも驚かぬ」という句を作り、生きる覚悟を自分に課しました。すると、来るわ来るわの椿事です。これでもか、これでも驚かぬかと変事が降りつづいています。いや、面白い面白い。あとわずかの残力で十二分に試されたいと、張り切っている今です。——皆さんも、新子に椿事を与えてください。

二〇〇一年四月一日

学長 時実 新子



おはようございます。

奈良ではお水取りの火の粉が舞っていますが、本号はもう五月、いつもながら二段とびの朝礼です。

某日、エントランスのチャイムが鳴って「カドカワが参りました」のお声。とんで迎えて握手しました。入獄を前にして胃を五分の四も除去した人は、凜々とお元気でした。いたわりや慰めの言葉などはまったく無用。励ましを受けたのは私のほうでしたが、「胃がんの激痛を与えられて、これに比べればどんな苦痛も耐え抜けると思った」とおっしゃったのと、「待つ人がいてくれるのは希望ですね」と、傍らの婚約者を紹介されたのが印象的でした。

「私は主宰である立場もわきまえず、その日その時の心のままに句を作り、覚え書きのページでも、悲苦をもろに出していました。その裸の私から何かひとつでも真実をみつけてくれる会員・誌友を信じているからです」と私が言いますと、ハルキさんが少しだけ羨ましそうな目で頷かれました。「私は対人対事のすべてを、まずは受容します。対処はそこからです。目の前がまづくらになつた時は泣きながら川柳を書きます。吐き尽くせば仄かな明るさが身を包むのを感じるのです」——私はその日どんどん喋り、再会を約しました。



おはようございます。

やつと桜が散つて、若葉の美しい神戸です。一歩一歩に生きているよろこびが溢れます。

その美しい街で私はこのところ悔し涙の明け暮れです。いつだつたか泉ピン子さんが、事務所から独立したとたんに電車の切符も買えなくて……と嘆いている記事を読みました。「何様でもあるまいに」と私は思った、それがそのまま自分にふりかかってきたのです。

つまり私は、世間の人人がごくあたりまえにやつていることができないのでした。たとえば郵便局で「順番票は入出金などちゃんと記入してから取るんです。呼んでも居ないと思うじゃないですか。先に札を取らないで！」と叱られ（ちなみにこの時、客は二人きりだった）、大型封筒を秤にのせると「勝手にのせないで。窓口はこちら！」と叱られるのです。

銀行のカードの暗証番号を忘れて仕方なく窓口から送金しようとすると、本名と筆名が違うからと四十分も待たされました。ちなみにこの日も客は三人きりだった。ハンコが正しくて出金はできた。そのお金をどの名前で誰に送金しようと私の勝手じやないのでしょうか。——そもそも梅雨ですね、私に代つて不義を討つてくれる雨を私は待っています。



おはようございます。

早くも「七月」という名の木馬が浮いたり沈んだりします。清姫も哀しい姫から凄まじい姫にと変身しますが、青葉もまた、日増しに強く恐ろしい緑に変わりつつあります。

神戸の新しい教室（サロン）も二回目を修了しました。私は「この人なら！」と期待するあまり、衆目の中でキツイ言葉をその人に投げかけることがあります。私は後に残る何もないのですが、言われた本人はひどく落ち込む。そういう人がいることに初めて気付きました。

新子を憎んでもいい。恨んでもいい。しかし、そのリベンジを作句の力として立ち向かってこそ、新子の川柳を継承していく人なのです。「世の中には弱い人もいるのよ」と言う人がいます。

私が相手をまちがえた？ そうは思いたくありません。私はすべての人に公平をモットーとしています。「ごめんね、私が言いすぎたわ。あなたに期待したことよ、わかってほしい」というアメも私は持ち合わせておりません。泣いて落ち込んで新子と縁を切つてくれてもかまいません。そういう人はどこかで撫で撫でしてもらつてください。かなしいけれど、私にはもうフォローする時間がありません。



おはようございます。

事務所支援のための暑中広告をありがとうございました。「川柳大学」としてお願いすることの多い中で、初めて私個人が皆さまに「援けて」と弱音を吐きました。大勢の方々の真心を決して忘れず、移転費用に当てさせていただきます。

たとえば一枚のはがきを書くとき、私は相手のお方が今、何に一番関心をお持ちなのかを考えます。結婚させる子女をおもちの方はそのことで頭がいっぱいでしょう。病む人やそのご家族は心を痛めておいでのことでしょう。ましてや連れ合いを亡くされた人の思いはながく晴れることはないでしょう。気候の挨拶などは抜きで、私はその事をおたずねします。

私にとって、今一番の関心事は「川柳大学」です。事務局の移転です。これが無事に終わって、東京事務局が動き始めるまでの私は鬼にも蛇にもなるうと思っています。

そんな私をご理解頂き、誠に、ありがとうございます。

「川柳大学」発足時の昂ぶりが甦つてしまります。あの日から数えて六年、いろいろなことがありました。しかし、おかげさまで「川柳大学」は健在です。主治医が「仕事を半分にしろ」と命じましたが、私は二倍にします。残力のすべてを注ぎます。新子と一緒に頑張つてくださいませ。



おはようございます。

猛暑の大会も盛会で、うれしいことでした。人と人が相会うことの大切さを改めて感じました。一人に会うということは万巻の書を読むにまさると実感しました。

引きこもり癖のある私も大反省して、これからは少なくとも年三回、皆さんとお会いすることにいたします。夏の大会を軸に、春秋二回、関東ブロックと関西ブロックと交互に20題句会をひらきます。作句レッスンと選者の養成が主たる目的ですが、「会う」も大きな楽しみです。もちろん、南北への旅や小句会も折あることに加えていきます。

八月はかなりの日数を東京事務局で過ごしましたが、暁の祈りは忘れた日がありません。病む人が多く、私の祈りは長く深くなっています。苦しいこと、痛いこと、悲しみのすべてを新子に打明けてください。「新子の祈りは効く」と信じてください。立ち直るのはあなたの自身ですが、私の祈りをスペースと思つてくださるとき、快癒はかならず早くなります。

さて、秋ですね。（死ねばこの風に逢えなくなる九月）
（彼岸花は九月の花のその九月）、灯の色も秋。涼やかに新しい事務局からの初朝礼でした。お元気で！

二〇〇一年九月一日

学長 時実新子



おはようございます。

物心両面から支えていただきまして、東京事務局も順調にスタートいたしました。心から御礼申しあげます。

なかなかスタッフの方々は夏休み返上で頑張つてくれております。心残して青物横丁から神戸への帰途につくとき、「ありがとうございます」が声になります。

実はただいままだ残暑きびしい神戸で9月号を作つているところです。事務所を失つた神戸スタッフが私宅に集まつて、サイゴノコウセイに汗しています。

編集長? さあ、どこにいるのでしょうか。なにしろダッシュユダッショの七月八月でしたから、秋田あたりの山の中でぐつすり眠つているのでしよう。

「任せる」決心には大きな信頼が必要です。神戸スタッフの真心をそのままバトンタッチした東京スタッフが、編集長を小休止させてくれたのだと思ひます。

私は、宇宙よりも巨きな力さまに「川柳大学」のすべてをゆだねています。千本の絹糸の束^{たわみ}を両手で握つていますと、ピク、ピクッと魚の引きを感じことがあります。その糸をたぐつて、いつでもあなたとお会いできます。学長がたるんでいたら、どうぞ叱つてくださいね。

二〇〇一年十月一日

学長 時実新子



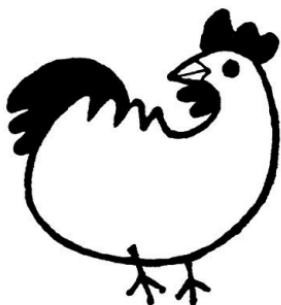
おはようございます。

スリムな9月号を送り出した新事務局は、体重を取り戻した10月号をお届けし、11月号も順調に発送態勢に入っています。

碌郎は編集職から降りて隠居になりたいらしいですが、東京スタッフは賢明で、ツメをかくし能力を小出しにしながら碌郎編集長を立ててくれています。したがつて彼は、仁王立ちになつて怒号したり、小娘になつてオネガイしたりしながら、ずっと東京の仮住居をつづけています。心身の健康のためにも結構なことです。

さて私はと申しますに、これはまったく籠の鳥です。私の遊び下手といつたら天下一品ですので、あちこちからいろいろと誘つてくださる声をはねのけ固辞しつつ、籠つております。ミイラになる寸前の状態です。

「一人」の確認期が人生のこんなところに用意されていよいよとは、ちょっと意外でした。夕方になるとクチビルが乾いてくつつくのですよ。びっくりです。——私の生業（しめきりのある書く仕事）は相変わらずなのですし、九月には教室も再開しました。碌郎のいない日々はとんとん仕事がはかどりますし、部屋もキレイに片付きます。なのに、何か変。みなさん、ご家族を大切になさいますように。



おはようございます。

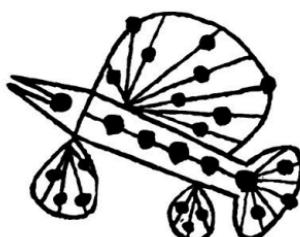
諦めていたヒガンバナに逢うことができました。新幹線の車窓からですが、滋賀県あたりでたくさん見ました。その花も立ち枯れた十月八日、遂にアフガンに火の手がありませんでした。なんと悲しいことでしよう。くり返されるニュースのどれを信じてよいのかわかりませんが、私は、戦争だけは嫌です。報復の報復、そのまた報復、なんと馬鹿気たことでしょう。男たちの戦争ごっこに巻き込まれたくありません。神の名を借りて殺し合う愚かさ。いつそのこと地球まるごと吹っとべばいいとさえ思います。

碌郎も同じ思いなのか「事務所に花が欲しいね」と申しますので、三つほど花瓶を置きました。戦争と花、やりきれなさい思いを癒してくれるのは小さな花かもしれません。

の人、この人が入院中です。再入院の人もいます。

私は祈るしかりません。巨きな力にひれ伏します。

いのちほど大切なものはない。戦争で死ぬ愚に比べれば、病いと闘う人は立派です。つらいでしが生き抜いてください。いのち枯れるまで赤く咲くヒガンバナのように、雪の中でかがやくナカマドの実のように。花すべてどれもみな、戦争する人間よりはずつとずつと立派です。



おはようございます。

そうして明けましておめでとうございます。

二〇〇一年は世界をゆるがす、そして日本もゆれる大変な年でしたが、川柳大学にとつても大きな節目の年でした。皆様の熱意に支えられて何とか継投の実りが見えはじめました今、改めて厚く御礼申しあげます。さて、カモメのジョナサンは個性的な鳥でした。群れよりも異なる飛び方を考案して冒險を重ねて いるうちに、墜落したのでしたね。ジョナサンのさいごがどうなつたのかは忘れてしました。反省して群れに戻つたのでしたかしら？

比べてリトルターン（小さなアジサシ）は、ある日浜

辺で自分が飛べなくなっていることに気付きます。ター

ンは一人で波打ち際を歩きはじめるのです。すると、小さなカニや貝殻や石ころや魚や、大きな流木のかげの船虫など、新しい発見がたくさんあつて、ターンは友達をふやしながら豊かな日日を過ごします。

どちらも同じ作家の大人の童話。私は読んでいないのですが、たぶんそんな寓話ではないかと想像します。あなたはジョナサン？ それともターン？ 私は？ これを考えながら二〇〇二年を歩こうと思っています。

二〇〇二年一月一日

学長 時実新子

新春詠 時実新子

初夢のジャンヌダルクに物申す

戦争はイヤだと言おう大声で

クリスタルホース初日に輝けり



おはようございます。

世界はどうあろうとも、よき年迎えをなさつたことと存じます。いまこそ、個を律するは個の時代ですから。

私も本年からエイジ・レスで生きることにしました。めでたい人間と思われているのか、新年巻頭エッセーをあちこちから頼まれます。ウマ年よね、と、まず考えます。次に馬は馬でも透明な馬がいいなど、ガラス好きの私は思うのです。そこで、「クリスタルホース初日に輝けり」を柱にして書くわけです。

すると、日本エアシステムの機内誌「アルカス」からFAXが入りまして、「至急カメラマンを行かせるから時実さんのクリスタルホースを撮影させてほしい。それをもって巻頭ページを飾りたい」との申し入れです。

あわてましたね、私は。だって、クリスタルホースなんか持つていないのでから。すぐに担当編集者を電話口へ呼んで私は言いました。「あのネ、作家の夢をわかつてくださいらないかしら。小さなガラスの馬をてのひらにのせて見ているうちに馬は体長五十センチ。そのおなかから朝日。虹も出たのよ! 馬の写真是銀座あたりで探してよ」。

皆さんも句の真実を守り抜くことです。作家ですもの。



おはようございます。

一月は去に二月は逃げると申しますが、年が改まりますとつめたい風にも「どこかに春」を感じます。

「光陰矢の如し」「歳月人を待たず」「少年老い易く学成り難し」とか、いろいろと思い出すことばのなかで、私は近ごろとみに歳月の流れが楽しくなつてきました。

速い、と感じたなら、自分も走ればよろしいし、一日が長いと感じたならば、自分もゆったりとすればよろしい。「自然・天然との一体感」なんて偉そうなことではなく、何と申しましようか、とにかく楽しくなりました。

（器栗咲かせどんな事にも驚かぬ）と吐いて二年。凡なる私はあらゆることに一喜一憂する自分にあきれ果てています。ほんとうは、文芸を志すわれら、驚かねばいけないのでです。

「どんな事にも驚かぬ」は、あまりの多事多難に私が肚に据えたいと思った警句で、確かにこの句を支えにはしてきたよう思います。たびたび、事あるごとに。

でも、それは日常の事。川柳はきよろきよろし、うかうかし、とちばちと驚くことが肝心です。それが瑞々しさを失わないでだてなのです。——私は、心を入れ替えて、今まで以上に驚くことにしました。それが楽しくなった理由です。



おはようございます。

お元気ですか。元気でいてくださいませね。私より若い仲間を次々と喪うことは身を切られるつらさです。

残された者はいやでも社会の一員として生きていかねばなりません。ひどい世の荒波を泳ぎ抜かねばなりません。見るを得ない現実があります。政治もゆらいであります。田中真紀子外務大臣が更迭されました。小泉人気がドーンと下がりました。この先どうなるのか、他人事ではあります。日常と文芸の乖離はなはだしい時代となりました。

さいわいなことに、私たちは短い時間であっても「川柳の世界」へ逃げ込むことができます。逃げ込んでみても、世界の中の日本、政治的なかけひき、社会現象、そういうものもろから逃げられない人は、存分の思いを川柳のかたちにして告発してください。

けれども、川柳はスローガンではありません。マスコミの二番煎じで「私」を忘れ果てるとき、川柳は詩からもつとも遠い落首的な五七五へと墮していくでしよう。せつかく逃げたオアシスです。しつかりと自分とあそび、人間のおもしろを楽しみたいものです。くり返します、「人生は一度」「川柳は詩である」。社会派も含めて「川柳は私」です。



おはようございます。

今はまだ三月なのですが、ちらちらと五月を見させてくれる日があります。誰がつて？ 空ですよ、空ですよ。
仕事のひとつ「百句解体」は、季節を先取りして書いてい
るのですが、担当の田村文さんが「二度楽しめてしあわせ」
と言つてくださつてうれしく思いました。

もうひとつ、毎日掲載二か月（日曜日を除いて五十回）と
いうエッセーの仕事があります。二十五本書いた時点で、私
は不意にペンを放り出しました。もう材料もない、書く気も
喪失してしまった。「ギブアップです。おゆるしください」
と弱音を吐きました。

担当者は西日本新聞の横尾さんというお方ですが、ゆつた
りとした声で「今決めないでおきましょう、少し休んでみて
それからでも遅くないでしよう」とおっしゃるのでした。
私、これが苦手なんですね。今決めて、ストップして心身
ともに楽になりたい。短気なのです。「すぐやる課」は息切
れも「すぐ」なんですよ。私はマラソン型じゃない。
でも、横尾さんの勝ちでした。書きたいことがまた溢れ
きて五十本脱稿。そのよろこびが今月の新子二十句にもなり
ました。短気は損氣。自分をあきらめないことですね。



おはようございます。

緑が日増しに濃くなっていますね。どうぞ、病む人には癒しを、健康な人にはさらなる元気を与えてほしいとねがいます。

ところで四月号からリニューアルした表紙はいかがでしょうか。Mr.ヨセフ・片岡の「夢」でスタートした「川柳大学」は、白谷達也氏の超一流の写真で重厚かつ氣位高く飾つていただきました。そうして今回の田中之さんの人物画です。

表紙は「顔」であり、中身の「志向」をも表すものです。白谷氏の写真と骨太の「川柳大学」という文字は、前編集長の精神そのものでした。編集長のカムバックをのぞむ声と等しく、白谷氏の写真よふたたび！の声もきこえてまいります。

私は、ほんの少し軽^{かる}やかになりたかったのかもしません。楽しさを求めてのかもしれません。しかし、軽やかと軽薄はちがいます。軽やかで深く、は「おもしろくてタメになる」という本誌の志向と同じです。田中之さんという女流画家のタッチに、私はそれを感じました。

東京スタッフが頑張ってくれております。彼や彼女たちへの私の思いを表紙に語つてほしいと期待もしているのです。

二〇〇二年六月一日

学長 時実 新子



おはようございます。

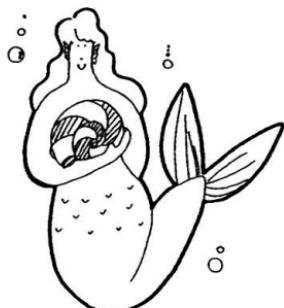
赤い月を見ました。東京事務所の午前四時半のことです。コーヒーとパンを一枚とイチゴミルクを食べてふり向くと、月は淡くなつて位置を下げていきました。その月をよぎつて一番電車が通りすぎます。まるで銀河鉄道です。

私が、もう少しだけ生きていきたいと思うのはこんな朝です。ゴトンゴトンゴトン、事務局も順調に走っています。悲しみを乗り越え、喜びに感謝しながら、みんなイイ顔。ありがたくて、コーヒーをもう一杯。これは、オルティスリベラ美由紀さんが毎月届けてくださるコロンビアコーヒーです。

「おはようございます！ みなさんお元気ですかア」

もう一度、声を張り上げましたら、なんと、東西南北から「おはようござります！」と元気なこだまでした。

第三種郵便が廃止されるというニュースに胸を痛めておりました。「總理、そりやないでしよう？ 日本の文化活動をあなたはつぶすおつもりですか」と抗議しましたところ、四月十九日に一応据えおくということになりました。ほつとしました。送料が三倍にもなつたらアウトですものね。泣かないようにしましょう。みずみずしい眸にキヤツチ。そうして七月二十八日、神戸でパチパチいたしましょうね。



おはようございます。

「読む」感性はどうまでも自由です。川柳大学でもこの一年、「読む」に重点を置いてきました。

「現代川柳の個性を読む」を「作家論」にチエンジしたのも一人で読む偏りに気付いたからです。三人が読めばかなり多面体になります。あなたの感性もプラスして読んでください。

私はマスコミ関係で「読んで選ぶ」仕事をいくつかもっています。先日、産経新聞社のエッセーの選で、ちょっと悔しい思いをしました。それは「群青」と題された一篇で、作者がその色を知り、好きになり、語源も学び、ついに実際の群青色と出会うというストーリーです。

群青が空に現れるのは、好天の日の落日の直後の、わずか二分間ほどです。私はこれを発見して誰にも言わないでいた。それを書いた人がいたわけです。同じような感性に私はよろこんで、これを一押しとしたのですが、他の選者の感性とくいちがつて、二対一で敗北しました。

「川柳大学」の新子作品は情野千里さんが読んでくれています。千里の眼を通して、こんなにもちがつた風景になるのかと、とても新鮮です。「ちがうちがう」と親が追っかけるのはみつともない。お互いに読む自由を尊重しましょうね。



おはようございます。お元気ですか。

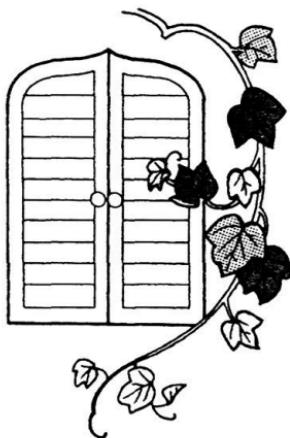
九月を思う七月です。九月新涼、あの風に逢うまでに、私たちいろいろいろな風に会うことでしょう。

思つても思うにはいかないけれど思う。それを「夢」と呼ぶ人もいます。なるべくならしい夢をみてください。

先日、「P.H.Pほんとうの時代」のインタビューを受けました。「人に言葉あり」というページです。たいていの人があ素敵な四字熟語を掲げておいでなのですが、なかなか思いつきません。

私は「今、」と答えました。昨年でしたか、NHKの「土曜オアシス」に出演して「今、」と書くつもりが「心、」と書いてしまったのでした。「心に点はいいですが、法話にも使えますな」と、田口恭雄和尚にほめられましたが、私はやっぱり「今、」を捨てられずにいたのです。

「今、」ということは「ふり向かず夢見ず」ということです。オールオアナッティング（全部か無か）の境地です。話していで「さみしい私」に気付いたのですが、後へ引けず……。だけど、「今、」には一瞬もあれば一日もあり一ヶ月もあり、春・夏・秋・冬ひつくるめての一年もあり。究極は一生も「今、」ではないでしょうか。



おはようございます。

とぶよろに月日は流れて、秋十月。そろつて元氣でいてくださいますように。

宿命星によりますと、私は故寺山修司や新庄剛志選手などとおなじ星。かなり常識はずれの発想をする個性派で困ったものですが、これを抑制されると運気は逃げる。常識派から何と言われようとままで生きるほうがよろしいとのことです。しかし、適宜ブレーキをかけてもらわないと暴走しますので、各位よろしくおねがいいたします。

さつそくに矢はとんできました。

私がラジオで喋った“夕暮れ二分四十秒の群青色”について詳細に説明しろとの便り。知りませんよ、そんなこと。で、思い出したのが阪神淡路大震災の時の句集「悲苦を超えて」です。あの中で私、たしか、「その刹那バラわっと咲くわっと散る」という句を出しました。すると某大学教授から「花と地震について研究したいので、バラの咲き散る状態を詳細に説明してほしい」との申し出があつたのです。知りませんよ、そんなこと。

つまり、文芸のでたらめ（センス・感受性）をゆるしてくれないのが常識人、中でも科学者です。両極に生きているのですねえ。敬して近寄らぬほうがよさそうです。

二〇〇二年十月一日

学長 時実新子



おはようございます。

酷暑にも台風にも負けずの秋の中、まずは目を洗うことにいたしましょう。

今年の秋田は雨、雨、雨でした。帰神の直前に大きな虹を見せてくれました。裏の林の桜の木から誕まれて谷をまたいだ見事さです。そうしてしかも二重の橋なのですよ。あまりのことに声が出ず、手ぶり身ぶりで六郎を叩き起きました。——短いようで長い時間、二人で黙って虹を見ていました。

「孝明さんが渡つて行かれたね」「私も見ましたよ」

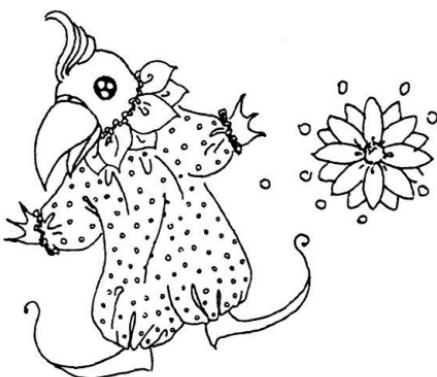
いつも寄り添つていらした宮武孝明さんと明子さんでした。秋田へは田中日出夫さんも立ち寄られました。ずっと亡き弘子さんがご一緒なので、私は何のお世話もしなくてよかつたのです。夫婦つてふしきな存在ですね。

さて、神戸に戻ったその足でメガネを作りに出掛けました。遠近両用、読書用、UVカット用と三つも作りましたので、もう大丈夫です。

涙を見せください。笑顔を見せてください。できればあなたが作句のときの眉根のしわも見せてください。私が握っている千本の絹糸も美しい秋色でひゅるると健在です。

二〇〇二年十一月一日

学長 時実新子



おはようございます。

光陰矢のごとしと申しますが、じつくり生きれば一年はかなりの収穫があります。

いまさらのように私が会得しましたことは、「悲しみは共有できない」ということでした。その人、この人に、ずいぶんな悲しみごとがありました。四六時中その人の身になつて悲しむことができなかつた私を、お許しください。

食べましたし眠りましたし、笑いました。ほんとうにごめんなさい。あとは歳月にと、手を放したことをお詫びいたします。正直いって、その人に降り積む歳月以上の癒しのお手伝いはできませんでした。

同様に、私の悲しみも共有してはもらえませんでした。

指先の小さなキズだつて自分にしか痛みは感じられないのですから、あたりまえです。それなのに、瞬時にしろ、私は人を恨みました。心のノートから削除もしました。ありもない念力さえ使おうとしました。

年の終わりに自分を恥じて北風に心を洗っています。目をとじていると、「先生、私のために元気でいてください」という本音が聞こえてきて、微笑が頬にひろがりました。ありがとう。あなたのためには、私は元気で新年を迎えます。



明けましておめでとうございます。

喪中の方々、さみしいお正月とお察しいたします。どうかおからだお大事になさってください。

さて、「川柳大学」は八年目に突入します。改めまして皆さまのご支援とご協力に対し、厚く御礼申しあげます。

思えば八年前の大地震に押されたような出発でした。以来、神戸事務局、東京事務局と、バトンタッチもうまくいきました。随所に「人有り」。会員・誌友の方々、事務局スタッフ、執筆陣、基金拝受の支え。私はほんとうに「人」に恵まれていて感謝するのです。

そういうわけでの「人頼み」は今年もつづくと思います。企画・計画まるでだめ、手帳も持たない私ですが、実行力は少々ある気がいたします。ですからお一人お一人が「こんなことやつてみたいメモ」、「遠大なる理想」、「夢のラフスケッチ」などなどを私に見せてください。

おつちよこちよいですから瞬発力はあり余っていますし、スピードもまだ衰えていませんので、ダッシュはお任せください。

とにかく皆さま、「学長よいしょ」をよろしくお願ひいたします。じゃ、ごいっしょにGO! GO!!

二〇〇三年一月一日

学長 時実 新子



おはようございます。

水仙の二月ですね。菜の花も寒風の中で春を探つてゐるようです。早春の花は長く嗅いでいると軽いめまいを起こすほど強く香ります。

12月号では綴じもれ本が出まして、一部の方々にたいへんごめいわくをかけました。印刷所、製本所、検品をしないで発送した事務局。ひつくるめて主宰の私の責任です。心よりお詫び申しあげます。

お叱りはごもつともながら、抗議文の中にずいぶんひどい文句を浴びせる人がいました。水仙や菜の花で口を塞がれ、束にした花で顔面を叩かれる思いを味わいました。はからずも見てしまった人の胸中。あやまちを責めるにも思いやりが必要だと、またひとつ学んだことです。

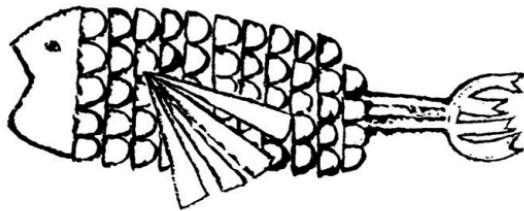
安藤まさかの入院というアクシデントで、これまたたいへんごめいわくをおかけしました。留守部隊のスタッフが一丸となつて事務局を守つてくれました。夜までがんばつて、北風の中へ帰つていく背に、思わず涙がこぼれました。

「思いやるこころ」、これを二月のスローガンとして、静かにしつかりと歩を進めたいと思つています。

おや、もう立春大吉ですね。日射しが春へ春へとのびていきます。ふつくらと開花の準備をなさつてください。

二〇〇三年二月一日

学長 時実新子



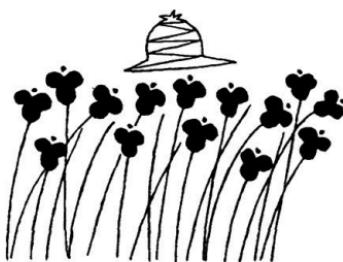
おはようございます。

この号が出るころの私は、もうピンシャンと歩いている」とと思ひますが、新年早々からしばらく松葉杖の身でした。誰のせいでもありません。自分の不注意から左足首の靭帯を切つてしまつたのです。ゲギッという音がしたとき、「シマツタ」と思ひました。

折悪しく六郎はインフルエンザで寝込んでいましたし、教室や審議会や選考会など外出の仕事が日白押しという時期だったからです。

でも、結果オーライでした。私は生まれて初めて初めての松葉杖や車椅子の苦しさを知ったことで、体の不自由な方々の痛みをほんとうに理解できるようになりました。教室も私がいいなことで結束し、力を合わせて自習の益をあげてくれました。六郎も近くの医者へ行き、「妻に伝染したときの対処法」まで聞いてくれたのです。「四十八時間以内に車椅子であつたかくして連れてらっしゃい」。どんな力も早い手当がかんじんだそうで、「まだか、まだか」とせつつくので力もついでに引きました。

「私」が消えても大丈夫。は心づよいことですが、今しばらくこの世にはばかることになりそうです。



おはようございます。

お元気ですか。病む方々も快方に向かっておいでですか。スタートの一月に一年分の休を取りまして、私も元気になりました。リハビリの試歩で中華街の春節祭に行きあい、めでたい獅子に頭を噛んでもらいましたから、アタマもたぶん丈夫だと思います。

おたよりを拝見していく「あれつ」と思うことがあります。尊敬する作家が「ちょっとおかしくなられた」と編集者から耳にすることもあります。心配ですが、すこしだけほつとすのも正直な気持ちです。

まだらボケして異世界にあそぶのも、いいじゃありませんか。往きつ戻りつしているうちにホンマモンの異次元へ旅立てる。そう思うとき、なんだかわくわくいたします。

それに、人間関係はシーソーみたいなものですから、元気すぎる人は知らず知らずのうちに相手の元気を奪っていることもあります。——我が家もただいま「六郎元気」の異常気象がつづいております。私を養護する義務からでしょうか、六郎はコマネズミです。

しかし、そろそろ徐々にシーソーを水平に戻さねばなりません。春の乱氣流を皆さんも上手に乗り切ってくださいね。



おはようございます。

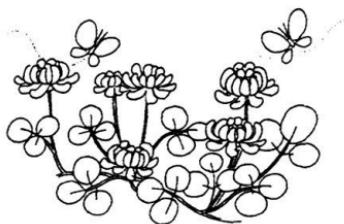
とつぜんですが「戦争は回避できるのでしょうか」と思
い悩んでいた三月の某日、どうぞやと五人の男がやって来ま
した。なに、わずか五分間のテレビ番組収録のためですが、
カメラ機材をかついた黒服隊だったので、私はアメリカ兵か
イラク兵かと錯覚したのです。

それほど私の神経はびりびりしています。

なぜ男は戦争を好むのか（好みない好もしい男性もいます
が）。戦争はいかなる理由があろうとも断じてイケマセン。
この号が出るころの世界の音が気がかりです。砲音や市民の
悲鳴が聞こえないことを祈るばかりです。

それで私は、タンスにひしめいている黒い服を捨てること
にしました。黒は便利な色です。人を理知的に見せ、体型も
カバーしてくれます。私もながいあいだ「黒」に甘えてきま
した。でも、せめてもの意志表示として、私はファッショニ
ズムを起こすことにしたのです。

「彩を着るぞ！」。それも春には春らしく秋には秋らしくは
自然に迎合する迷彩色ですから、軍服に通じてだめ。反対色
で目立つこと。ダサイと言われようが、狂ったかと言われよ
うが、反戦の旗印です。賛成の人、挙手実行して下さい。



おはようございます。

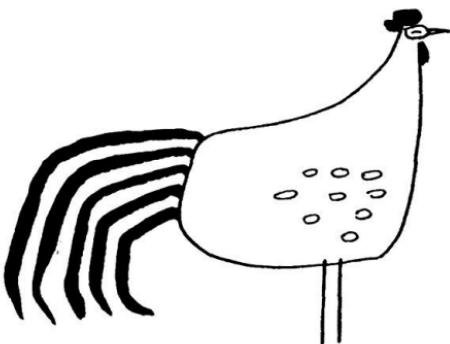
目に心地よい若葉の好季となりました。アウトドア派もインンドア派も川柳にいそしみましょう。

私もこのところ晩の読書タイムが取れるようになつてうれしいです。佐藤愛子さんの全四巻のユーモアから元気をもらつたり、高峰秀子さんの生き方にお叱りを受けたりしております。

返信はがきを書く時間もできました。お花見の日もゲット。仕事が半減したことのメリットを大いに活用したいと雑巾バケツも買ったのですが、私、エアコン掃除の三脚に乗る足がふるえます。天井も拭けません。

ああ情けなやと思つていた矢先に、介護期まつただなかの人たちからのお便りが舞い込みました。みなさん親御さんをとても愛していらっしゃる（当たります）のに、自分の自由を奪われる苦痛を訴えられるのです。

ごもつとも。私も親を見送るまでに幾度ためいきを吐いたことかと共感します。けれども今、自分が老いていく中で、正直につらいです。私も近未来に周りの者たちを困らせることになる。私の母の「めいわくかけて」という声が甦ります。お尋ねします。親は子に迷惑かけてはいけないのでしょうか。



おはようございます。

初夏つていいですね。それともあなたは初秋派でしょうか。なにごとも「初」はときめきます。

川柳大学の大会も初めて八月から五月に移しました。都合のよい人、わるい人、こもごもでしようけれど、好季の大会が充実してくれることを期待しております。

そうなのです。号は7月なのに只今はまだ五月の初旬。たぶん会える、きっと会える、ぜひ会いたいと、私の思いは募る一方です。「また会える」が少なくなってきたました。「また」と思つていて会えなくなつた人がいます。私自身が消える可能性も高くなつてきたからです。

人と人は会うことで豊かになります。よろこびにあふれた顔と顔ほど美しいものはありません。四月の終わりに秋田で小さな集いがありました（『竹』『馬』合同出版会）ときもその感をつよくしました。少年が老人になつての再会に、健さんも六郎も眸を輝かせておりました。

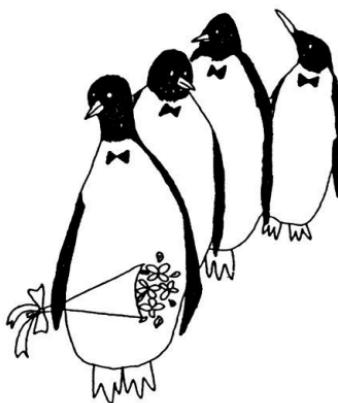
会いましょう、語りましょう。

飲みましょう、歌いましょう。

川柳は座の文芸です。文芸は一人の作業ではありますが、時に肩をぶれあうことで「元気」の交換をいたしましょう。

二〇〇三年七月一日

学長 時実新子



おはようございます。

大会を終えた爽やかな風です。これから梅雨に入るのがうそみたいな、もう夏の日差しです。

私はパラソルを持っていません。UVカットクリームを体中に塗つて西へ東へ南へ北へと歩いています。

すると、犬モ歩ケバ棒ニ当タルのですねえ。六郎について行つた皮フ科で、ふらふらと医師の前。

「どうしました?」「いや、もう、五十年もの古傷ですから」と言いつつ私は手足四本をぬつと差し出していたのでした。

「ウオの目、痛いでしよう」「これは水虫じゃないですよ」

「ヒジのタコ、これは手強いけど努力してキレイにしましょう」なんて点検されているうちに、とりあえずウオの目を削り取られたらしいのです。

ん? 痛くない。ウオの目はトリの目になつて飛んでつちやつたのです。「六郎!」と私はさけびました。「先生ありがとう」と言うつもりが、まちがえるほどうれしかつた。

私の川柳暮らし五十年と、本誌百号が来年ドッキングします。「またまたかア」とおっしゃらないで、自祝の宴につきて下さいね。すでに会場はおさえました。すでにして当日の絵も脳裏に出来上がっています。どうぞよろしく。



おはようございます。

暦はまもなく秋ですが、現実は梅雨明け十日前です。今年は梅雨らしい梅雨だつたせいか、私にしては珍しく本に親しました。

中でも『日本語のこころ』(日本エッセイストクラブ編)という文春文庫はおすすめです。私の一篇も入っているからではありません。オムニバス形式なので六十人の個性が楽しめるからです。一人の作家に耽溺するのもよろしいが、いろんな話から得るものは多彩で新鮮ですよ。

たとえば、松本仁一氏(朝日新聞編集委員)の話の中に次のようにあります。

イスラム教もユダヤ教も豚肉を食べないが、その理由がちがう。ユダヤ人が「反芻しない動物、つまり草食ができず穀物を食べる豚は人間と競合するから」と理屈っぽいのに比べて、アフリカ人はさまざまな理由のあげくに言い放った。

「もう、放つといってください！あなたが猫を食べたくないようには、私は豚を食べたくないのです！」

なんたる名答。これぞ川柳じやありませんか。

私はガハハと笑い、手を打ってバルコニーへ出ます。ラムネ色の空が広がつて、今日は洗濯物が乾きそうです。



おはようございます。

夏を楽しくお過ごしでしたか。私は梅雨明けもない秋田で時折恵まれる陽光はすでに秋。夏を知らずに過ごしました。

某日某夜、消し忘れたテレビをふり向きますと「ふたりのフリーダ」という絵が映つておりました。

ご存じのお方も多いかと思いますが、メキシコの女流画家で、生涯自画像を書きつけた人です。鏡を見て進行形で書きつけたのです。「ふたりのフリーダ」は、彼女が夫への愛を断てぬまま離婚を決意する葛藤の絵です。とび出した心臓を自ら切る鍔からは鮮血がしたたり落ちています。流産の悲しみも絵にしています。

進行形で「私」をかく。容赦なく抉り出す。何と川柳に似ていますことか。フリーダ・カーロは自画像に執しましたが、それはまさるもなくメキシコという国の時代を語つてもいるのです。一の字につながつた濃い眉のフリーダが、その夜は私を眠らせてくれませんでした。

生きて書く。大仰に構えることはありませんけれど、何も書かない日々は死んでいるのかもしれない。もつたいないと私は思いました。——皆さんもどうか自分に恵まれたら書く」という才能を、もう一度見直してください。



おはようございます。

「もう少し大人になれないかね」と天から声が降る。
 大人になるつてどういうことなのでしょうか。人を傷つけ
 ないよう、とりあえずほめておく。公私を混同しない。物
 事を好きと嫌いに分別しない。おどろかざわがず、人を頼
 らず頼られて、万人を説得する英知をもつ。自分のことは後
 まわしで憂國の貌をくずさない。自我的爪をかくす。

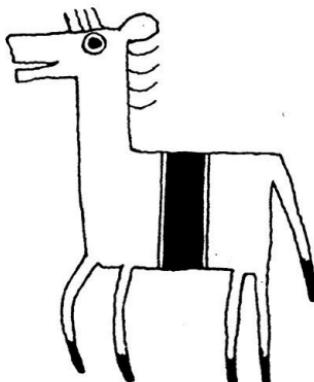
大人になるつてむずかしいことなのですね。

とてものことになれません。

「座つていると何でもできるんだがね、起立したとたんに何
 もできない。それが老いるということだよ」と言い残した先
 輩がいます。聞いたときには理解できなかつたそれが、今、
 少しずつわかりかけてきました。

つまり、口だけ、心だけが達者ということなのですね、老
 人は。ここにヒントをみつけました。

大人になる必要はないのです。いや、なつてもよろしいが
 終に無力を悟つてさびしがるくらいなら、いつそのこと小人
 を貫くのも生き方のひとつだとと思うわけです。——短絡的な
 発言で人を刺し、好きと嫌いを価値基準とし、あくまでも自
 我を通す。何と川柳的ではありませんか。



おはようございます。

曾野綾子氏の話の受け売りですが、ギリシャ神話では三人の運命の女神が人間の命を決める事になつてゐる。ゼウスがまず人間の生命の重さを量つてそれを三人の姉妹に告げる。クロト（つむぎ手）、ラケシス（配り手）、アトロボス（切り手）の三姉妹は毎日黙々と私たちの生涯をつむぎ、計り、切る仕事をしているのだという。

また、アトラスという巨大神はずうつと天空を支えているのが仕事だという。毎日大驚に肝臓を食べられつづけるプロメテウスは次の日にはまた肝臓が再生して生きづけねばならないのだという。

「死ぬことができない」以上の惨めな運命はない、と、曾野綾子氏は言うのである。三姉妹のおかげで「からならず死ねる」私たちの未来の幸福。しかも晩年にさしかかった者はさらに幸福である。どんなにいやなことも、もうそんなに長く耐えないで済むからである。

曾野さんの言葉から目を上げると、東の空が明るくなつていました。幸福感がゆたゆたと身を包みます。実はつい先刻までの私は暗く沈んでいたのでした。生老病死すべからく受容して解放を待つ。良書ときに読むべし、ですね。



あけましておめでとうございます。

今年は本誌百号、ついでに私の文業五十年という節目。なかとお世話になりますが、どうぞよろしくお願ひいたします。

私はオードリー・ヘプバーンとおないどしです。心ひそかにヘプバーンに憧れて生きてきました。現実の彼女は銀幕でかがやいたあと、晩年は福祉事業にも貢献して立派に人生の幕を閉じました。

死におくれた私は折ふしに彼女の映画を見ながら、今もまだ若く美しいヘプバーンに夢をもらっています。先日も偶然テレビに映った「マイ・フェア・レディ」（一九六四年）にうつつを抜かしてお鍋を焦がしたばかりです。

あの映画の中に“運がよけりや”という歌が何度かで出来ますね。ヒギンズ教授をイギンズとしか発言できない田舎娘が言語を磨き、素晴らしいレディとして社交界の華となる筋立てですが、見どころは他にもありました。たとえば独身主義のヒギンズ教授と生意気な娘イライザの愛は「男と女」が芸術（人生）の根源であることを思い知らせてくれます。

今年の川柳大学の節目も“運がよけりや”大成功だと思います私は、この楽天的性格を皆様にお許し願うしかありません。



おはようございます。

私は朝日放送番組審議会の委員をしておりまして、宿題のビデオを見るのも仕事の一つです。

先月はサントリーミステリー大賞スペシャル「運命が見える手」というのを見ました。不幸な出生の女の子が心やさしく美しい娘になつて子を生んで死ぬ物語りですが、その娘が運命が見える手の持ち主なのです。

誰かの手を握ったとたんにはぱぱぱと未来がフラッシュするのです。見えるけれど変える力のない娘は「気をつけて」としか言えません。ドラマは多彩でめまぐるしく進み、私は疲れ果て、もういいよと思いつ、この娘のハッピーエンドを望みました。

でもそれでは大賞は取れなかつたのでしょうかね、娘も出産直後に死んでエンドとなりました。むづかしいところです。

「あーあ」とのびていふと、テープが巻き戻された画面にデザインの巨人・田中一光が映っていました。「光朝」という文字を残した人といえば皆さんもご存じでしょう。

異才天才は疲れますね。私もよく「川柳の目で書いてください」と言われるのですが、とんでもない。川柳の目は川柳のためにだけ使いたいです。凡人はそれが精いっぱいです。



おはようございます。

年の瀬、正月もあらばこそその月刊誌。事務局スタッフと、全国の会員・誌友の皆様にお札を申しあげます。

私も2月号のゲラを見ているところですが、ちょっと気になつたところがあります。

「12月号この一句」で高橋裕子さんが杉山昌善さんの一句にコメントしています。(『藏の戸を閉じて介護と向かい合う』)という句です。「閉じちゃいけません」「向かい合っちゃいけません」「やっぱり解つてないんだな、男の人は」という明るい口調です。裕子さんの明色評はもちろん彼女の自由なですからこれでよろしいのです。

しかし、昌善さんのこの句を「木の実抄」に採った私の考えも聞いてほしいと思いました。

彼は藏の中で母上を介護しているのではない。藏は昌善さんの心でもあるわけです。その戸を閉じて彼は今「介護」という事を真剣に考えている。向かい合う姿は自分と自分なのだから当然です。「暗闇で自分に問う」形は作句の原点です。長い介護に疲れ、死んでほしいと思う瞬間もあったかもしない。憎くて愛しい哀の母子像に泣いた私は、長考の藏から出て「母さん」と呼んだ昌善さんの声にはっとしました。



おはようございます。

百号記念特集にお寄せいただいたご厚意、まことにありがとうございます。

この子九つまだ死ぬまだ死ぬ

とは、私の昔々の句ですが、誌齢は百でもまだ暦年齢は十歳にも満たぬ川柳大学です。次の節目へ向かって精進あるのみ。各自それぞれ自在に伸びてください。

ほら、竹の音が聞こえるでしょう。竹、いよいよ太く、清々かに強く、しなやかにそよぐ音を楽しみに、私も歩いてまいります。

阿修羅は、善神から悪神へ、そしてふたたび善神によみがえつて仏教の守護神になつたのだと、興福寺の多川俊映貫首は語られました。ただ、人が背負つた過去からなかなか自由になれないように、阿修羅もまた「好戦的で邪悪なイメージ」がなかなか払拭できないでいる。だからこそ「つねに」人は「心の中の阿修羅と向き合う勇気」をもちたいと。

お話の一端ですが、私ははつといたしました。

幸か不幸か、私たちは阿修羅をさらけ出し、ねじ伏せ、また白日のもとにさらす文芸「川柳」に生きております。百号に至つてやつと「幸福なのだ」と言い切れる気がしていきます。



おはようございます。

空の色がだんだん白っぽくなっています。五月晴れをつくるために、空は冬の深い紺をいつたん薄めて、改めて五月の青色にするのですね。その作業を見破られないために地上を桜で埋めつくす。それが春なのですね。

などとほんやり考へてゐる晩の食卓には玉子がひとつ。その横に「ゆでたまご」と書いた紙が置かれています。

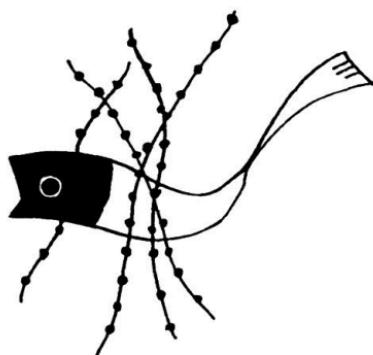
まずはお水をと冷蔵庫を開けると剥いた八朔（はつさく）の実がガラス器に山盛り。また紙ありて「好きなだけ食べなさい」。うれしいじやありませんか。私はごぼごぼと一人分の珈琲をわかし、食パンを焼いてピーナツバターをたっぷり塗ります。玉子と八朔、もちろんいただきました。

実は今、桜はまだで風花が舞う日もありの三月初旬。四月特集号の陣痛まつただなかなのです。この食卓も九時には片付けられて編集机に早変わりします。

玉子と八朔、六郎がこんなにやさしいのは疲れが極限にきている証拠なのでちよつと心配です。

私は「温泉へ行こう！」と大書して壁に張りました。起きてきた六郎がそれを見てにつこりしました。

すでにお手元の4月号をもう一度見てやつてください。



おはようございます。

皆さん今朝も快便でしたか。快食・快眠・快便は健康のパロメーターであり、人生の至福です。

それにつけて思い出す話があります。

モーツアルトの譜面にはウンコウンコと書き散らされ、恋文にも「今すぐ逢いに来てくんなきやウンコするぞ」と書いていたと。——実は私、これを知ったのは3月25日放送のテレビ番組「紳助の『子供に教えてはいけない! 健人伝』」からでした。出演していたタレントたちは一斉に「下品だ」「つまらん」で片付けてしまったのですが、私は感動したのです。

モーツアルトの天才ぶりは多くのエピソードを残していくますが、ウンコは究極の花マルです。譜面のウンコウンコは心が曲にならない焦り。恋文は無垢な希求に外なりません。「欲しい」「どうしても欲しい」が叶わないとき「ウンコする」のは動物か幼児です。大人はそんなことしません。しない分、純粹な欲望は体の中でガスと化すわけです。

4月9日の朝日放送番組審議会で「紳助の——」が取り上げられ、私はモーツアルトのために泣いて訴えました。居並ぶ委員の諸氏はそんな私にあきれられたようでした。



おはようございます。

二か月先の7月号に「待つてよ」とさけびつつ、季節を二度味わえるゆたかさを感じています。

若葉の木々を書きわけてエアメールが届きました。

四半世紀ぶりの友人夫婦の写真が入っていてびっくりしました。偶然入手した文藝手帖で私の現在の住所を知ったのだそうです。横着な私は二十五年を語る手間を省いて川柳大学4月特大号を送りました。

さあそれからのメールラッシュ。その中にジャラリと音のする袋があつて、プレスレットが出てきました。エリザベステーラーがクレオパトラを演じた時使つたもの(?)なんて。私はふたたび柿若葉の陰に隠れたりました。

四半世紀、二十五年前。

そのころ皆さんは何をなさっていましたか。

血液型A人間は過去に生き、B型の人は未来に生きるのだといわれますが、私は過去がきらいです。生まれていきなり今、感覚なのです。未来、もとよりありません。

東の空が明けていきます。いくらノンキでも今日はありますから、コーヒーを飲んでビワを食べました。六月六日がどうぞこのビワのように美味しい日でありますように。



おはようございます。

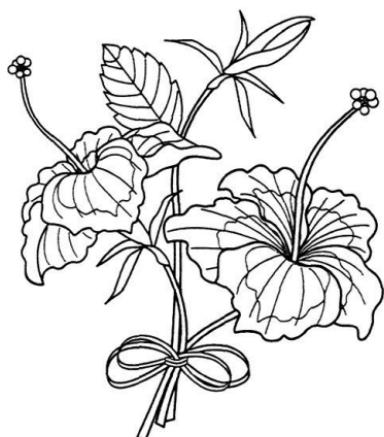
大会を終えて三日目の朝です。皆様がお帰りになるころにひと雨あつたようですが、今朝の神戸は晴れています。

出席の方々、ごくろうさまでございました。
欠席の方々、十月十七日には東京20題句会ですから、そのときはぜひお会いしたいとねがっています。

ニュースは皇太子さまご夫妻のこと、イラクから無言の帰国をされた報道カメラマンのこと、柏崎と福井のご家族のこと、サミットのこと、年金のこと、などさまざまですが、なんとなく発言ははばかられて、夫婦で反対意見をたたかわすのみです。物が言えないムードはよくありませんね。

ポストへの道に花を植えてくださっている人がいます。
さくら草、ポピー、つつじ、あじさいと咲きついで、坂の

苦しさを忘れさせてくれます。上り坂よりも下りで息切れするのなぜだろうかと考えていると、ウサギを思い出しました。ウサギは前肢が短いので上り上手ですね。下りはつんのめる。「そうだ。ウサギ追いしかの山だ。ウサギは上へ上へと追つて捕えて食う」。そこから延々と六郎のふるさと讃歌です。「あ、カモメが飛んだ」と話のコシを折つてベランダへ。われは海の子。私はすこぶる元気です。



おはようございます。

季節が一か月ほど先行しているのでしょうか。猛暑、洪水、お見舞申しあげます。この一ヶ月のそれを地球はどこで取り戻すのでしょうか。

さて私は、かなり昔から「訴求」ということばを川柳論の中で使つてきました。訴えて求める。ごく当たりまえの作句姿勢だと思っていたのですが、改めて辞書を引いてみますと主として広告・宣伝などによつて購買欲をそそること、と出ておりました。

川柳も作品を発表するとき、この訴求力が自然にはたらくのは当たりまえという考えに変わりはありません。よい作品を生み出す原動力に「伝達」をプラスする（意識する）のが作家ですから。

話は変わりますが、曾我ひとみさんのジャカルタ空港での一途な目が忘れられません。あのキスシーンがあれこれ取り沙汰されましたが、私は曾我さんが急にアメリカ人の妻に戻つたしぐさではなく、あれは彼女の、心の底からの「訴求」の具現だと思いました。

話は変わつていないのでした。訴求の姿は美しい。私も、天に訴求して、清涼の九月を待つていてるところです。



おはようございます。

10月号の入稿から初校、再校、念校、完成発送のあいだにオリンピックの結果も出るのですね。イラクも早く平穏を取り戻すといいですね。

時は流れでやみません。阪神淡路大震災も十年という歳月を刻みました。実はその特集を企画し、この10月号で募集する予定でした。編集部もチラシを集めてくれておりました。

待ツタをかけたのは私です。

戦争も災害も風化させないで語り継ぎ、人間の力を結集してこれに打ち克つていくことは、とても大切なことです。しかし、企画中に北陸の洪水禍があり、人災に至つては無事な日のほうが珍らしいあります。私も阪神淡路十周年特集に反対する者ではありませんが、たまたま阪神であつた、そこだけに焦点を当て、同類の作品を並べることにはいささかの疑義を抱きました。もっとマクロに、たとえば「天災と人間」という括りにできないものか。そもそも私は、天災と人災とは大いに異なる。対する私たちの思念も異なる。という考えをもつております。

そんなこんなで意見まとまらず、私が出鼻をくじいた形になりました。この企画、もうしばらく考え方させてください。



おはようございます。

猛暑、台風、荒れ狂つた夏をよくぞご無事で秋を迎えられました。

九月再開した教室で私がそう申しますと「はまるものがあつたから」という声があちこちからきこえました。オリンピックにはまつた人、テロに心を痛めてアメリカ大統領選にはまつている人、ケータイのストラップにずうつとヨン様を吊るしている人などいろいろです。プロ野球の行方に一喜一憂するのも自由です。

川柳にはまつていた、という人は残念ながらいませんでしたが、川柳はもう私たちと一身同体。いまさらはまるでもないのです。

さて私はそういうつた世界の大事にはまらず、ひたすらにそこここで起きる小さな事件のことを考えていました。アメリカが銃社会なら日本は刃物社会。刺して殺して火を放つ、というパターンが横行しています。

通り魔や無差別殺人や愉快犯はさておき、怨恨による事件は特に私を悲しませます。いつ、どこで自分が犯人と入れかわるか知れないからです。名探偵シンコは犯人を予想してそれがピタリと当たるたびに、一人で深く泣いております。



おはようございます。

朝の部屋に柿のカキイロ、蜜柑のミカンイロ、葡萄のブドウイロなどを見ますと「ああ秋だなあ」と思います。今朝はこれに石榴が加わったのでひときわ美しい秋です。

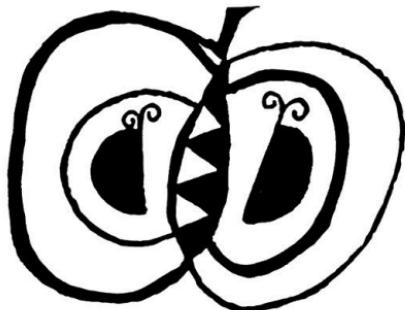
でもこれは自然ではない。私が作った秋なのが少しさみしくも思われます。——先日ふとヒガンバナを見たいと息子に駄々をこねてドライブさせました。またの日はススキが見たいと秋田へ飛んで健さんにごめいわくをかけました。

秋色にこんなにこだわった年はありません。長かつた酷暑のせいだけではありません。いつの秋も人が中心で、その周囲に秋は自然に漂っていたのです。人が消えた作為の秋は、私にかなりの違和感を残しました。

違和感といえば十月五日でしたかの新聞に見知らぬ男が歯を出して笑っている大写真が載つておどろきました。イチローが笑うなんて、考えられないことだったからです。

いや、262本の新記録を打ち立てたイチローがビールを飲もうが多弁になろうが笑おうが自由です。祝福すべきです。でもなんだか裏切られたようで、そう感じた自分がまた許せなくて、一、二、三日むつりと過ごしました。

川柳の作為も意外性も、思えば難しいコトかもしれません。



あけましておめでとうございます。

とは申せ、新潟県中越地震も兵庫の洪水もまだ治まらぬ心騒ぎのままのごあいさつです。

自分の希望で仕事を減少しつつある私は、暁の読書と考える時間を持てるようになりました。

読むより先に考えるのです。読書はその答合わせのような気がしています。例によって今朝も曾野綾子さんの答にわが意を得ました。

アフリカのある村では死者が出ると呪いのせいだとし、その犯人を村人が決めるのだそうです。たいていが村の厄介者の老女で、体の良い姥捨てですね。老女たちはゆらゆらと集まって手仕事などをしながら教会から与えられる二食で命を繋いでいるそうです。それは動物園のライオンに等しいではないかと曾野さんは言います。内容に大差はあっても早々と老後のラクを買う集団生活とも似ている。もつと自立を。

病気したり大老人になつて肉体の機能が退化の極に達したのなら話は別です。ポケットにメガネとメモと小さなハサミを持ち歩いていると言うのは佐藤愛子さんです。大・中・小に分ければ、私は曆年齢では中老人ですが、まだかなり自分ることは自分でできる幸せを今朝も深く感謝しました。



おはようございます。

もう一月だなんて、いいかげんに月刊誌の仕組みに慣れなければいけませんのに、やっぱり変な気分です。

昨年があまりにも多事でしたので、なるべく静かなあけくれをと望んでいますが、果たせますかどうか。

なにしろ世界も日本も荒れ狂いましたので、震災先輩県の街神戸は募金箱であふれています。加えて社会鍋、愛犬の箱、子どもたちの箱、どれも看過できませんから大変です。

「あれから十年」のイベントも花ざかりです。私も二つ三つお役を引き受けて年を越す予定。いや越したつもりです。

あふれるといえば本もそうですね。自費出版も盛んです。自分史や句集・歌集・詩集・絵本、人生の区切りとして本を残すことはいいことですし、あくまでも自由です。

しかし、募金箱のごく一部が怪しいように、残念ながら著者をたぶらかす業者もいますので気をつけてください。

あ、こんなことに口出しするようでは、とてものことには静かなあけくれとはまらないのでした。

暁恒例の読書タイムにステキな一文と出会いました。洗濯物の干し方だけで姑を活写する内田春菊さんの「読ませる力」に感服しました。川柳の材も身近、身内と学んだことです。



おはようございます。

めまぐるしい世界の動き、天変地異の中にも、春は確實に近づいております。人間の浅知恵を嘲笑するかに、です。

暦もあります。一年ごとに区切つてもらわないとには無間地獄がつづきます。歳末には見えなかつたものが

正月にはくつきりと見える。ふしぎなありがたさです。

昨年は川柳大学も新陳代謝はなはだしい年でした。

去るべくして人は去り、来るべくして人は来ます。

「ながいあいだりがとうございました」と振る手。「ようこそ、川柳大学へ」と挙げる手。私の手も悲喜こもごも忙しいことでした。

「先を見る眼」にすぐれた人がいます。たとえば某マジシャンは遠からず手品ブームが去るであろう不安を口にし、某ビン芸人は早くもお笑いブームの衰退を予見してバンド結成の夢を語つたりしています。

正しいことかもしれません。形あるものはかならず無くなり、ブームの永遠もあり得ないからです。けれども、だからといって「今」をおろそかにする者に大成はありません。とつぜん道が無くなつて慌てふためく人が私は好きです。その時おのずから展ける道が本当のあなたの道なのです。



おはようございます。

坂の下の方から咲き始めた山茶花は、当然ながら下の方から散りはじめていました。勢いのよい坂の上の花に押されているように見えますが、盛りの花をゆつたりと見守つてはつとしているのが本当でしょう。

坂を下りていくたびに人生を思つたりします。中途で二度ほど「きれいだね」と足をとめるのは相棒です。人なら五十歳あたりの木だと、私はほほえみます。

坂を下りきった処に信号があります。うまく青になると小さなよろこびが湧きますが、たいてい赤です。私を置いてきぼりにした相棒の大きな背中が地団駄ふんでいるのも小さなふふふです。

「相棒」というテレビ番組があります。一時間モノですが、スピードとキレのあるドラマで、相棒も私も気に入っています。五十歳（？）になった水谷豊の演技がいささかクサイのですが、坂の山茶花のように、彼も坂のちょうど真ん中辺でふんばるにはあのスタイルしかないのだろうと思ひます。

川柳界の五十歳の実年齢は六十歳でしょうか。中心的存在として光っています。「ガンバル」に代る「ファンバル」は最近みつけたことばです。坂の真ん中辺の彼らに乾杯！



おはようございます。

昔々あるところに水車漕ぎの名人がいました。彼のつくる米や粉は天下一品でした。ある日のこと、名人はふと足を止めました。この水車はどういう仕組みで回っているのか、水流はどうなっているのか、水質はどうなのだろう。勉強してもっと立派な水車を作り、研究してもっと効率よく仕事をしようと思い立ち、都へ旅立ったのです。

水車は止まりました。一度と動くことはありませんでした。私の言いたいことはわかつてくださいたと思います。

めまぐるしい世の流れに遅れないように、より賢く効率よく生きるために、勉強し研究することはよいことです。しかし、水車も句もリクツをもつともきらいます。

名人が無心に漕いでいた水車は、珠玉のような米や粉を生みました。では、名人は勉強も研究もしないで生涯水車を漕いでいればよかつたのでしょうか。

いいえ、向上心は大切です。では、ではと、私も三日ほど考えました。水車を漕ぐ足は衰えていきますから、名人の考えは正しいのです。ただ、行動がいけませんでした。水車を離れて都へ行つたのがまちがいでした。分担ということ、適性ということ。皆さんも水車の上で考えてみてください。



おはようございます。

今現在の私はまだ見ていませんが、この号が出るころにはみなさんも私もホヤホヤの合同川柳集『輪舞の森』を手にしていることでしょう。孫の誕生を産院の廊下で待ちかねている心境。若い人はわが子誕生なのでワクワクも一入でしょう。作家賞も発表されます。こちらは誌友さんも参加なので、思ひもかけぬ結果が出ているかもしませんね。

どちらも「助産」役の人があいてくださつてこそその誕生です。あれこれ思うのは自由ですが、陰のご苦労を忘れないようになしたいものです。

私もデスクワークを口実に一步も外へ出ないで、ずっと六郎に助けてもらっていました。買い出し、料理、ゴミ出し、すべて。気がつくと六郎はめきめきと元気になり、私はこの世の奪衣婆のごとく荒んでおりました。これではならじと外出すれば見事なるペングン歩き。六郎さんのおかげを口にしながら半分は恨めしくも思つた。バチ当たりなことです。

暁の祈りのあと、音楽浴をはじめました。群ようこさんのやさしさをまるまる猫との暮らしや更年期まつだなかの正直な悩み「潔さが欲しい」なども再読しつつ、徐々に自分を取り戻しています。みなさんも生氣復活を計つてください。



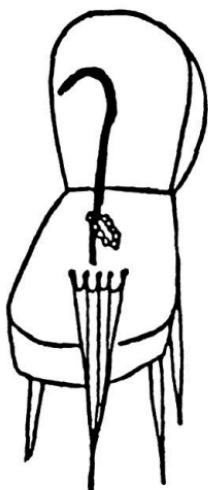
おはようございます。

花疲れ出でいませんか。私は少々人に疲れています。私が
欲ばかりだからです。たとえば外出したら複数のことをやつて
戻ろうとしますので、ついオーバーワークになるのですね。

カルチャースクールも午前と午後、二つの教室で立つたま
ま計四時間喋りまくるので、終わるとぐつたりです。「今日
は座つて話そう」「今日こそローテンションで静かに」と思
うのですが、それができません。気がつけば開脚姿勢で声を
張り、くだらぬギヤグで教室を笑わせ、湯気の立つ授業にな
っているのです。困ったものです。

先日、大丸A組で「犬」という席題の合評をやりました。
私も選に加わるのですが、どうにも丸が入らない。それでパ
スしちゃつた。誰も気付かないだろうとたかをくくつてしま
したら、「先生の丸がないのはどうして?」と大ブーリング。
私はとつさに「犬がきらいだから」と笑つて逃げましたが、
選者が題をさらつてはミもフタもない。失敗でした。

教育論で有名な齋藤孝氏は明快なお方です。「ミッショソ
(使命) パッション(情熱) ハイテンション(上機嫌) こそ
教師の資格」とおっしゃいます。三つ目の「自分を上機嫌に
保つこと」は日常でも至難のわざです、ハイ。



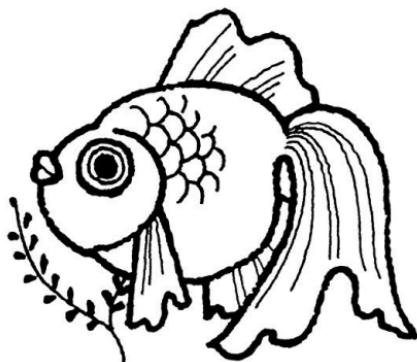
おはようございます。

思いもかけず、五月は救急車での入院となり、東京大会も欠席で、申し訳ありませんでした。

病室から外を眺めて、つくづくと羨ましかったのは、歩く人、散歩する犬、自転車の人、タクシーなどでした。あの人たちとあのベンチで語りあいたいと、どんなに望んだことでしょう。

絶え間ない点滴に繋がれ、酸素マスクを離せない日々にいちばん苦しいのは対話でした。それで、身内も面会謝絶にしましたので、孤独もしつかり味わいました。呼吸が少しらくになると、こんどは退屈とのたかいでした。こんなに退屈ならあの世のほうが楽しいかもと、四度ほど窓から飛ぼうとしましたが、その勇気も出ないほど退屈なのでした。十五日ベッドにいると、元へ戻るには三十日はかかると聞いていますので、もうしばらくおとなしくしていようと思いつます。これを書いているのは六月七日です。

その間に東京大会があつたわけです。新幹線が遅れたりして気をもみましたが、出席者みなさんの総力で無事に楽しい一日だつたそうで、大安心しました。私も在宅で雑誌選をしながらとても幸せです。ありがとうございます。



おはようございます。

七月の空も地もだだつ子のように暑れでおりますが、それもこれも澄んだブルーになるためのプロセスなのです。ゆるして、足をふんばって、濁流に流されないようにしましょう。キリギリスが鳴いています。お隣の張さんのベランダで一生懸命鳴いています。上隣サンからはネコフンジヤツタが聴こえます。

つまり、私の耳はこの世の音をキャッチできるようになつたのです。ありがとうございます。

ブーランの人は急がない。イライラは恥ずかしい。と思つて暮らしていらっしゃるそうです。たとえば道に迷つたおばあさんを目的地まで連れて行き、半日近くも遅刻した公務員はその日の優等生なのです。「よくやつた」とほめられる。バスへ乗れば後部座席からミカンの袋がリレーされ、運転手の近くの人は剥いてお口へ入れてあげる。いいですねえ。

大西俊和会員の画廊さんじゅで、昭和三十年代の絵本をいただきました。——私も、この時代におかあさんとして暮らしていたんだと思うと、急にこの世がなつかしく思えて、ボストへの坂道にアタック。よたよたしながら成功しました。



おはようございます。

まだまだ残暑きびしいことですが、秋の日差しが膝に届く日が来たら、ぱらぱらとめくつてみてください。何をつて、膝のまわりに散らかっている「川柳大学」のバックナンバーです。

自分のところだけでなく、アトランダムに活字を拾つてみてください。ほめ合いばかりでつまらんと思つていたページから、思いもかけないヒントがみつかりますよ。

「某誌は批評を求めてきた。批評こそ論の場だ。鑑賞々々にはもう飽きた」と言つて出て行つた人がいますが、鑑賞とは「芸術作品を理解し味わうこと」です。「鑑賞批評」とはいいますが、「批評鑑賞」とはいわないのです。つまり、まずは理解し味わうのが評のスタートです。

「批評」という熟語の好きな某誌の編集人は、その日どうしても「鑑賞」という文字が思い出せなくて「批評を——」と軽く使つたのかもしれないじゃありませんか。

その辺が見抜けなくて、「批評を私に求めてきた、さすがの見識人だ。なまぬるいお池（川柳大学）でばちやばちなどしてられない」と飛び出た人は、「それでも私は永久に新子が好き」などと言うのです。好かれたくナイとです。



おはようございます。

白か黒かはそれなりに不動ですが、グレーボーンというのは揺れて不安で居心地のわるいものです。しかし、ある日ふと灰色の壁にスカイトピーが似合つたりして、振幅の大きさを愉しむこともあります。

11月号とは申せ、九月十一日の投票日が今日です。

政治も混沌、私も混沌です。グレー、グレー何もかもです。

この春から、いいえ、昨年からの体調不良をずっとごまかしてきました。休めなかつたのではなく、休まなかつたのは自分の責任です。

そして五月三日、救急車さわぎを起こしました。グレーボーンはいよいよ濃く、限りなく黒に近くなりました。それでまだ、私は私をごまかしてきたのです。

天地神明、祖靈、関係者の皆様に心からお詫び申上げます。ただいま、丸裸で点検中です。一からやり直しです。しばらく失礼しますこと、ご了承ください。



おはようございます、お久しぶりです。

私は今、天のご褒美と罰をいつべんに享けてたたかっております。

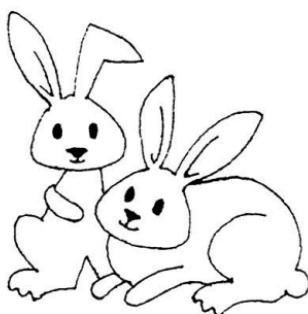
ご褒美は千の花びらにして皆さんにもらつてほしい。そのためには、老いて病んでどんなに醜くなつていても、何としても皆さんにお会いしたいと願つています。

その願いの中には皆さんの「あつと驚くタメゴロー」（古いですネ）のお顔を見たいという、イタズラごころもあります。また、私は、罰はもうついでだから、皆さんの罪もぜんぶ出してもらつて引き受けようと、勝手に思い、思うことで美しい涙を流していたのです。

が、これもストップしました。もうこれ以上、イイ子ぶりっこはやめた。苦しい。かんべんして。皆さん自分の罪くらい自分で処理しなさいよ。——というふうに変わっていきます。

つまり皆さん、これが新子なのです。やつとやつと、少しずつ、元へ戻りつつあるわけです。「そうか」と愁眉をひらくてくださる人、「そうか」とがっかりする人さまざまですが、すべて皆さんのご自由です。

リアルタイムの私は今、フィギュアスケート見物中です。



おはようございます。

心地よい朝を迎えたましたか。

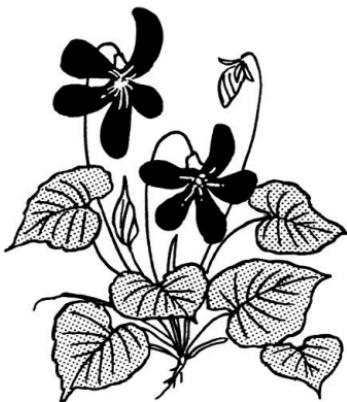
私も穴から出てそろりそろりと歩いておりますが、行く先で貸してくださる車イスについて甘えてします。一日の三分の一は車イスのことを考えているあります。「坂の町だからダメ。自分で歩かないとダメ」と仲を割かるたびに恋しさは募る一方です。

これを「ハマル（嵌る）」と言うのだろうかと思い、電子辞書で「ハマル」を引いてみました。

「穴やふかみなどに落ちこむ」「だまされる」「計略にひつかる」「アクニハマル」「ドロニハマル」「女色に溺れる」その他では「型にはまる」「条件にはまる」などと平凡で、どうも私の車イスに対する思いにぴたりではありません。

買ってもらえないでの、私もこの恋を徐々にあきらめますが、私が車イスを好きになつた理由は二つです。一つは人のやさしさに身をゆだねてゐる至福の時間を知つたこと。もう一つは、ふと動かしてみたとたんに車の運転を思い出したことです。車は車イス以上に許されない恋人です。

川村百代さんの車恋いがよくわかります。百代さん、私の分も走つてね。皆さんもドライブに誘つてくださいね。



おはようございます。

四月三日七時、スルスルとFAX。「北のお部屋へ行つてください、鳶が鳴いています」と、美しい文字です。北の部屋へ行つてホーホケキョを二回聞きました。裏は六甲山ですから夏までずっと鳴いてくれます。

「南のベランダへ出て、ごらんあそばせ、満月です」とFAX. するのは私です。ちょっと変わったご近所づきあいです。

ベランダには匂いスミレが咲いています。これもやさしい人からのプレゼントです。四月二日の時事放談で、かの塩じいさまは菖蒲の花がお好きと知りました。スミレからの連想で何の意味もないのですが、話はポスト小泉で、「今から騒ぐことはない。菖蒲の花の咲くころにはそれぞれが主張を掲げて名乗り出るじゃろ」とおっしゃつただけなのです。

しかし人間は、ふとしたはずみにふと出たことばが本質を披瀝したりするので面白い。塩じいさまと菖蒲、これ以上お似合いの花はないと思いました。

リアルタイムから離れられなくてすみません。もうひとつは同じく四月三日の甲子園準決勝で、初陣の長崎清峰が強いPLを6対0で破ったのです。私の涙がどちらに感動したのか、これを六月までに考えることにします。



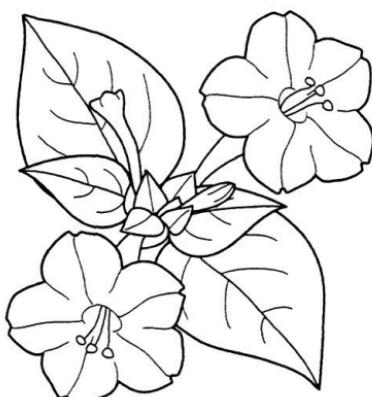
おはようございます。

花のころ、若葉のころ、みなさん上手にエンジョイしておいでのようすをゼミ会報で知つてよろこんでおります。

五ヶ月の安定期に入られた紀子さまもそろそろ外のご公務です。「紀子さま 秋篠宮さまのお手を」と三回もテロップに出たので「いいわネ」と思わず口にしました。

それというのも私、バスステップですってんこりんを二回もやつたからです。うしろには六郎サマがいたのですが、どこか遠くを見ていたらしいのです。六郎サマは私のことを心配していつもしろを歩いてくれるのですが、「お手」を摑むことができません。ステップに倒れている私を助けるよりも乗降口の改善交渉を始めるタイプのお方ですから自力で這い上がりました。でも街へ出られる日はうれしい日です。

ゼミ会報を拝見しますと、事務局の労をねぎらいながらもその不満の多さにびっくりします。タイム・ラグ（季節や時間のズレ）は月刊誌の避けて通れないリスクなのですが、たとえば「駅伝」に三か月のズレがあつても、走る人の息づかが魅力ですよね。歳時記ではないのですから。——実はあの企画は某俳誌から私が無断拝借したもの。おかあさんのチヨイワルを責めないで走つてほしいとねがっています。



おはようございます。

六月四日の大会、ありがとうございました。欠席の方々のお心も会場にみなぎつておりました。私も終日しあわせでした。この日の皆さんとのパワーを忘れず、がんばりたいと思いました。

さて、齋藤孝氏とは一度きりしかお会いしたこと�이あります。なんとか親しい氣のする存在です。その齋藤さんがこんどは「四字熟語力」という本を出されました。

「優柔不斷」も「三日坊主」も、「我田引水」も「一進一退」なども、「力」さえ付けければ自分を納得させ、生きる肥やしになるというのです。

六月四日の壇上で、私は「川柳大学は日本一」と発言しました。「自画自賛」とはこのことです。不快に思われた人が0.5人ほどいらっしゃったかもしませんが、私は私の客觀性に自信があります。

イチロー語録にも自画自賛力がたくさんみつかりますよ。「ぼくは天才ではありません。なぜかというと自分がどうしてヒットを打てるかを説明できるからです」なんて。

頭、いいですね。

空は八月になつていきます。大会バー・ティーのジャズが鳴りひびいています。神戸とジャズと皆さん、ありがとうございます。

二〇〇六年八月一日

学長 時実新子



おはようございます。

七月八月、早く九月へたどり着いて、からだを風でシャツフルしてもらいたいものです。九月は新涼、新しい風が吹きます。おつとその前に「麦の秋」という駅もありますね。

リアルタイムの私は今、その駅で遊んでいます。

「ヘネギボーズ」というトリオを結成したのです。「ズ」ですからあと四、五人はOK。リードボーカルは息子ですが、上手な人との交替もOKです。

持ち歌は、目下「麦畑」「時代屋の恋」「ブルーライトヨコハマ」「浪花節だよ人生は」などですが、「麦畑」をマスターするのに四苦八苦が現状です。

「おらでええのか」と嫁。「おらおめえでええてば」と息子。私は車イスでエンピツのタクトを一段と大きく振りながら、「愛の花咲く」 麦畑」と、声を張り上げるわけです。

息子はまあまあの歌上手なのですが、嫁は声のきれいな節無しソプラノで、素つ頓狂。ネーミングの「ヘネギボーズ」の家元です。それに私のリハビリアルトが加わるので、蚊が大喜びです。車イスの周りはブンブンブン武勇伝武勇伝です。今回は、声張り上げてくれる嫁に川柳大学の皆さんをだぶらせて、私のお宝自慢をさせて頂きました。近況以上です。



おはようございます。

初蟬を聞いて十日目の朝、私も異変が起きました。洗濯が出来るようになつたのです。元々洗濯は大好きですが一年余りあきらめておりました。

「出来る」と思つたのはスリッパを洗つた時でした。ごろんごろん、みるみる黒くなる水の心地よいこと。一回目は一つ一つ袋に入れて四足洗いました。脱水の時にフタを開けるとピピピピピピピ、キケンです指が千切れますよ。

遠心分離機の原理で回る回るぶんぶん回る。

スリッパがきれいになるとマットが気になつて、これもぶんぶん洗いました。レースのカーテンも洗いました。

どうしたんだろう私。と蟬の声の中に立つていました。病気は治つてはおりません。しかし、アクセルを踏むと走り出したのです。もちろん三十分でブレーキは踏みました。

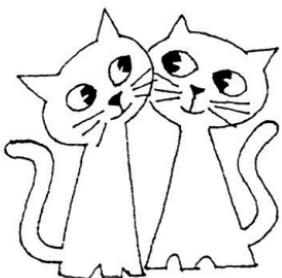
実はきのう、魔女の宅急便が届いたのです。

三つの西瓜から三人の魔女が現れて、私を素敵なレストランへ連れて行つてくれたのです。その余力が洗濯をさせてくれたのです。そうとしか考えられません。

今、おなかペこペこです。六郎作の丸くて大きなおにぎりが出来るのを待っています。

二〇〇六年十月一日

学長 時実新子



おはようございます。

眼の手術を前に、またまた肺炎にやられてしました。ずいぶんいい子ぶりっこしてごめんなさい。ガンバリズムはいけませんね。ずっと前に捨てたコトバを私はまた拾っていたのでした。肩の力を抜いて、皆さんに甘えることにしました。句数にこだわらず、その時々の素直を素直に出すことにします。非力の発見またよろしからずや。

天窓を切る手休めて星の菓子

恨情の鎮まる岸辺 音があり

美しい日は東北のあの辺り



おはようございます。

乾いた蝶が三つとんでいました。秋草の色で。空もすっかり枯れ色ですね。

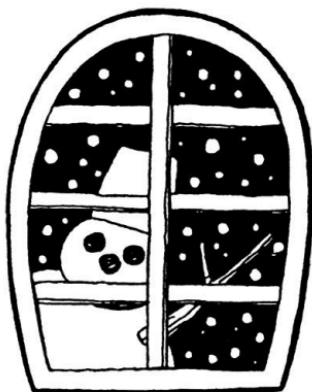
当方も立ちどまるとカサコソと音がしました。面白いので毎日歩いています。

安静時間は消音テレビを眺めています。そうして発見しました。CMのすばらしさです。記憶のどこかに残るようになりますね。

神戸でゲラを見せてもらっています。みなさん元気で個性豊かでうれしいです。一方通行の対話も楽しみながら今、11月号初校を終えました。早く東京事務局まで行けるようになりたいです。

年を取るということ。想像はしていましたが、こうもみつともなく悔しく切なく情ないものかと思い知りました。加えて病いを得ました私は格別ですが、相棒を見るにつけても感慨深いものがあります。

一刻も早くスイッチを切換えないといけません。「感謝」というゾーンへの脱却です。それにつけてもみんなの作品は何よりの良薬です。ありがとうございました。



おめでとうございます。

ふと、振り向いてみる気になりました。
六甲の山々です。

今まで海へ目を細めてのご挨拶でした。ごめんなさい、
あけまして今年もよろしくおねがいします。
瞬間すがれた桔梗の花がひろがりました。秋の名残りであ
りましょう。

「大学の中もかなり動きがありますね」

「そうでしようか。年末年始に向かつて多少の片付けや模様
替えをするのはどのご家庭もあたりまえでしよう」
みなさん何が気になられるのか。大きな流れに乗つてぶか
りぶかりの心境です。

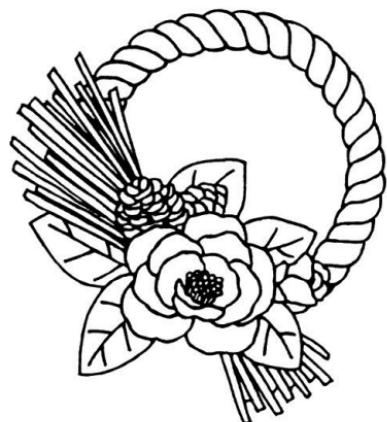
命より少うし長く銅鑼は鳴る 新子

秋田から健さんが来神の日、ほめてもらつた句。くちづさ
めば六郎が「やつぱり佳句だね、くやしいが」と笑う。
一句浮かんだだけでも新年へのおみやげか。私もうれし
い。

皆さんはどうな句を手みやげに年を越されましたか。
年賀状はこの誌上で失礼したのに枕許に紅白の箱を置いて
待つておられる私です。

二〇〇七年一月一日

学長 時実新子



おはようございます。

寒天の飛び出す今朝のめでたやな
年を迎えたことでしょう。

私も正直にみなさんと甘えながら淡々と年を越し、淡々と新年をスタートしたつもりなのですが、何せ病状が日替わりなので、どこかがウソのようになってしまします。

「そんなにシンバイはしてねえよ」

「そうでした。ゴメンナサイ」
「ユルサナイ。ハハハ……」

これが一番らくです。みなさんも私も。

このところ、目覚めは三通りです。NHK第一かBSか教育12チャンネルか。BSの美しい音楽の景色の中へそつと足を下ろすときの快感。何のことはない、つけっぱなしのテレビがBSになっているだけのことですが、ふしぎなのはチャンネルを操作した人物です。

某朝、私は眼らずに待っていました、眠ったふりをして。下手から浩葉、上手から利秋がマラソン姿で走って来て合流し、浩葉がさりげなくBSに切換え、利秋がボリュームを少し下げて走り抜けていきました。明日はどなたかな?



おはようございます。

少しスピードを上げて一〇〇七年が動き始めました。

「もう三月?」「もう花が散ったの」

と言つてゐるうちにどんどん年の窓は動きます。

マルチ人間・青島さんを送ることばの中に、「正しい風を吹かせて幸せを集める人」といつた意味の戒名の話が出でいました。ぜんぜん、すごい、などを意味不明のまま使う風潮やテレビをわがもの顔の一部のマスコミ人の無礼にもオドロイテいます。

今、靴を縫っています。まほろしの。

スズメ、ハト、カラス、トンビまで窓枠で順番待ち。フルトでは、まもなく汗ばむので、木綿。サンダルは溜めておいた細い紐（お菓子などの）を使います。
こんな幻を見るようになつたのも、坂の、とつぜん閉じた靴屋さんのせいだと思うのですよ。

皆さんも店を閉じないでくださいね。閉店はクセになつて困ります。「作れないなア」「もう止めよう」「休みたい」と思つても、とにかく「継続は宝なり」です。私のように小鳥のブーツなど空想で作つてゐるうちに、ホンマモノの川柳が作れるようになるものです。



おはようございます。

外は冬でしようか、春でしようか。タンポボはつめたい風の中でもう咲いているでしょうね。

「タンポボが咲いたら」「逢おうね」と約束した人がいますので、今、部屋の中を歩く練習をしています。トットコトツトコ歩くのじゃなく、ゆっくりと大股で歩くのは難しい。壁に頼らずに歩くのですが、これがまた難しい。気が先に歩こうとするのでツンのめつて三回ころびました。この青アザが消えるころには春でしょう。

そういえば「春になつたら」で逃げた約束も二つか三つあります。

あなたもあるでしよう。私とのアレも未遂ですよ。でも、私との約束はなかったことにいたしましょう。「川柳が作れないのは川柳大学のせいだ、なんて。取消します」での。取消さなくていいです。私もそう思う日が稀にありますから。「川柳大学」はすごい柱です。私は今、彼（女性にとつては）です。男性にとつては彼女（いなかつたら、ころん）で、青アザをもつと沢山作っているはずです。毎月毎月、彼に縋つてよっこらしょです。人間つて弱い。それが当たり前です。

